

あなた!

の学校を

国際化

するために

— WORLD STUDIES

学校現場での開発教育の視点に立った授業のアイデア
既設教科での開発教育の実践のために

I *divin*



第1章 あなたの学校を国際化するために 目次

1. 編集者より	1
2. 学校を国際化するために	3
3. 英語教育の現場から	14
4. 国語から見た開発教育	24
5. 美術科からの提言	28
6. 世界の音楽を学校教育に導入するについて	31
7. 事例「ガムランの夕べ」によせて	33
8. グローバル教育と英語	39
9. ニューヨークから日本の国際化への提言	44

編集者

編集・企画 太田 弘

- | | | |
|-------|--------------|------------------------|
| 1. 2. | 太田 弘 | (慶應義塾ニューヨーク学院教諭) |
| 3. | 伊東 直子 | (東京都豊島区道和中学校教諭) |
| 4. | 武田 尚子 | (東京都立府中高等学校教諭) |
| 5. | 臼井 香里 | (東京都八王子市由木中学校教諭) |
| 6. | 野田 宏人 | (元慶應義塾普通部教諭) |
| 7. | 森重 行敏 | (インターミュージック／武蔵野音楽大学講師) |
| 8. | キップ ケイツ | (鳥取大学教養部英語科外国人講師) |
| 9. | 堀智子／荻上礼子／太田弘 | |

1. 編集者より

- 新しい国際化への教育をめざして -

戦後、わが国の教育の中で「国際化」が叫ばれ続けて久しい。1950年代に、わが国が国際社会への復帰を希求するなかで、教育における国際化が進み、国際理解教育の実践も多く刊行された。その中でも、私の身近にも地理・地図学者であった保柳睦美氏によって「ユネスコの国際理解教育」(古今書院)が刊行されてから、早、30余年が過ぎている。

このことを思うと、わが国における「国際化」への課題ははもう半世紀の間、このテーマを追い続けている。その間、わが国では「ユネスコ国際学校」の実験的試みがなされ、初期の「国際理解教育」が戦後のわが国の国際的、いから実践を踏まえて実施されてきたことは多くの方の知るところであろう。しかし、すでに90年代に入り、文部省が新たに平成4年度に実施する学校指導要領を策定するに当たり、臨時教育審議会などの答申を受けて発表された内容には、現在の社会環境の変化を受けて情報化がその柱となる一方で、なおも教育の国際化、それは一方で教育制度そのものの国際化を含む教育による「ひと」の国際化を、なおも強く望んでいることを示している。戦後40年を経てわが国の教育は

なおも「教育の国際化」を学校に求めているのである。

従って、わが国における「国際化」はこうした国民すべてが共感する、将来に向けて確実に必要になる資質、言わば「国是」ともなる重要なテーマであると言える。しかし、ここ数年を見るならば、海外生活経験を持つ生徒・児童(帰国子女)が急激にわが国の社会・経済の国際化に伴って確実に増加し、また大學生を始め様々な世代に渡って、気軽に海外旅行を楽しむことが可能になり、今までかつて日本人が経験しなかったほどの数で、日本人が個人として海外との交渉を持ち始め、日本の国内には以前には見られなかったほどの外国人が生活するようになってきている。また、われわれ日本人が接触する地域もいままでのように欧米に限らず、中南米からアフリカ、アジアと全世界的にその範囲を広め、さまざまなところで日本人が現地の生活者と関係を持つ時代を迎えつつある。また、さらに、国内においても、戦前からの在日の韓国・朝鮮人とは別に、近年の急速に増加するおもにアジアからの労働者が東京、大阪に限らず、全国の地域にまでわが国に労働の場を求めて住まう現実が生まれてきている。

これは、今がある意味で「戦後の国際社会への復帰」を前提にした「国際化」ではなく、むしろ、わが国が真の国際国家としてその資質が問われる「新しい国際化」への試練の時期になりつつあることを示している。しかし、こうした時代に、次代を生きる子供たちが持つ世界観はいかにあるべきかの議論は、残念ながらあまり公的な文章の中には出てこない。つまり、「国際化は今いっそう必要になったが、その国際化の中身が見えてこない」、「国際人を育てることは必要だが、どのようにしたらいいのだろうか」や「具体的に、国際理解をめざす授業とはどんなものと言うのか?」、「いったい国際化とは何か?」など今もってはっきり議論されていない状態で、また再び教育の基本に「国際化の必要性」が謳われているのである。今、この「国際化」の中身を明確し、より具体的な目標と方向性を持って、きわめて現実的に「学校における国際化」の方向を提示しなくてはならない。特に途上国の現実を重視し、またその原因を直視することによって偏りのない視点で世界の多様な価値と出会い、先進国も含めて人類全体の生命と地球の環境・生態を大切に考える新しい国際化時代の学習(まだ名前はないが)が必要で

ある。これを、私たちは「開発教育」と呼びたい。従来の「国際理解教育」とも重なるものだし、また最近、ユネスコが提唱している「国際教育」とも類似しているとも言えるかもしれない。が、その名称にはこだわららない。今、とにかく「新しい時代の国際化」をめざす教育が、多くの学校現場で求められている。

ここには、「開発教育」をキーワードとして全国で地道な実践を行っている学校の教師たちとその横顔を紹介し、特に「開発教育」を切り口にして「学校の国際化」を進める学校教育の現状と課題を中心に集約した。また、従来から「国際化」をその得意としながらもなかなか実践の事例が少いとされていた「英語教育」における「開発教育」の視点を重視した実践事例を伊東直子氏(現・東京都豊島区立道和中学校)に、さらにおよそ「開発教育」の実践の事例として見出だせなかった「国語教育」の中で、どのような視点から実践が可能なのかを模索した武田尚子氏(東京都立府中高校)に、また、「芸術教育」における実践事例は、すでにスライド開発教育教材キット「地球の仲間たち」を作り、多くの実践を積んでいる「開発教育を考える会」の代表、

臼井香里(東京都八王子市由木中学校)にそれぞれ執筆をお願いした。従来、「開発教育」は社会科学などでさまざまな実践事例が紹介されてきたが、ここでは先に述べたように今後の「開発教育」の広がりを願った観点から他の教科の実践事例を意識的に紹介をしている。

最後に、今回は試験的ではあるが、「開発教育」をどういった角度から導入すべきであるかという観点から実施した「音楽教育」の中での実践へのヒントとして「民族音楽の学習」から入る試みをおこなった記録を付加し

てある。

1990年3月 太田 弘

慶應義塾ニューヨーク学院教諭

2. 学校を国際化するために

戦略と方法、開発教育/国際教育における全国での実践とその事例

1. これからの国際化への新しい方法論を握る「国際教育」と「開発教育」

現在、日本をとりまく国際化の方向は、かつて日本が過去に経験したことのないくらい勢いと数で私たちの生活に押し寄せてきている。特に、戦後のわが国の国際社会における経済的な役割はわれわれが国内でする認識をはるかに越えて、海外で日本が及ぼす影響が大きくなりつつある。特に、従来の欧米との関係に加えて、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカなどの途上国へ及ぼす影響は、この数年の経済援助の飛躍的な増大と相俟って、かつてわが国が持った事のない影響力を持つつつあると言われている。そんな中で、第二次大戦から40数年を経て、21世紀を目前にした現在でも、「南北問題」に代表される先進工業国と発展途上国との経済格差は一向に縮まる気配もなく、むしろ、より現実には厳しい局面も見られつつあるという現実には…これからのわが国が担うべき国際社会への期待とともに、国民、ひとりひとりが取り組まなくてはならない課題のひとつになりつつ

つある。そういった意味においても、これらの「国際化」の要素として、わが国の持つ途上国に対する態度、理解、行為などがきわめて重要なものとなりつつあることは確かである。規模と金額において世界第一級の援助大国となった日本が、開発援助・協力の質の面での充実を求められていることは、近年のマスコミなどで知られるところである。その意味でも、これからの「国際」を軸にした教育の基本には、欧米との国際関係を十分に重視しつつも、それ以上に途上国との国際関係を意識した学習を学校も社会も取る必要が生まれてきている。

その意味からも、現在の「国際」に関する今後、教育がとるひとつの方向としては、開発、平和、人権など特に途上国において、まだ十分に確保されていない「人」の生きる権利を大切にする学習が必要であると考えられる。現在、わが国の戦後一貫して実施され、「国際化」を進める中心教育となってきたユネスコなどの実施してきた「国際理解教育」と言う名称の中にも、先の現代世界の現実を見据えた視点から、新たに「国際教育」という名称の登場も新しい時代の国際化の方向性を示しているものと思われる。ここでは、そ

ういった一般的な国際化の中で、特に途上国理解、アジア理解、南北問題の本質の理解と追及、自らの生き方にまで言及し、21世紀の新しい地球環境の問題、地球社会のありかたを考える「開発教育」という視点から、国際化を進める方法をもとめたいと思っている。

2. 「開発教育」とは何か？

開発教育とは、まったく耳慣れない方もあるかと思われる。特に学校においては、おおよそはじめて耳ににされる方も多いだろう。わが国では、その名称が主にマスコミで使われて、やっと10年が経たという程度だと言っても過言ではないだろう。また、欧米で生まれた教育の視点だと言っても、欧米でその必要が叫ばれてから、まだ30年も経ていないというものである。「開発教育の歩み」（赤石和則：東和大学国際教育研究所）によると、戦後、60年代にアフリカで独立が相次ぎ、戦後社会の課題として生まれた「南北問題」、経済的な格差の是正に向けた北側の認識がその始まりと言うことができよう。最初にカナダの市民グループが途上国から帰った青年たちがせ国内で途上国に対するカナ

ダ市民の理解を促す活動を始めるところからその萌芽が見られてから、スウェーデン、オランダやさらにイギリスなどで積極的に学校や社会での途上国に関する教育活動が始まった。

時は、70年代でアジアではベトナム戦争が激化し、アメリカの敗北、「援助」に対する根本的な問いかけや、「国連開発の10年」の評価を経て、より「南北問題」が深刻化する時代がさらに、先進国の市民に対する途上国の理解の必要性を訴える動きが見られた。わが国では、やっと70年代の後半になって、やはり、途上国でボランティア活動に参加し帰国した青年たちや国際政治に中でも途上国の開発問題に関心を持つ研究者を中心に、わが国にも「開発教育」の必要性が言われるようになってきた。開発教育シンポジウムの開催(79,80.)、開発教育協議会(82)の設立という具合に、遅まきながらも「開発教育」の芽がわが国にも生まれることになった。

わが国における「開発教育」の定義は、これと言った決まった定義はまだないと言えるが、一応、開発教育協議会が開発教育の目指す方向について、次のような説明をしている。

●「開発教育 (Development E

ducation) は1970年代に入ってからヨーロッパ諸国やカナダ、オーストラリアなど、いわゆる開発協力で熱心な国々で始められました。それは「これから21世紀にかけて早急に克服を必要としている人類社会に共通な課題、つまり低開発について、その様相と原因を理解し、地球社会構成国の相互異存性について認識を深め、開発をすすめていこうとする多くの努力や試みを知り、そして開発のために積極的に参加しようという態度を養うことをねらいとする学校内外の学習・教育活動」だと要約することができます。したがって、開発教育は単に途上国に関する知識を増やしたり、また、そこに住む人びとに対するあわれみの感情を強調することではありません。むしろ、途上国に広範にみられる貧困や抑圧を地球規模の不正としてとらえ、その原因がしばしば工業諸国の中に存在することを学び、問題に気づいたら自分としてはどうすればいいのかを考える、そしてその問題の解決にすすんで参加していこうする関心や態度を養うことにねらいと本質があるといえます。」

また、海外での開発教育に関する定義とそ

の学習の目標についても同じ様な説明が成されているけれども、一応、その共通的なものとして、金谷敏郎(元国立教育研究所)は次のような整理をしている。

■「開発教育」の共通するキーワード：

低開発、その原因、条件、様相、開発の意味参加、行動、態度

■実践的定義・アプローチ：

発展途上国の総合的(政治経済的側面だけでなく)理解・学習

身近なところにある南北問題(人権問題、環境汚染、消費生活など)の学習

低開発あるいは南北問題の諸様相

(人権、平和、暴力、貧困、飢餓、人口爆発、環境汚染、疾病あるいは保健衛生、都市のスラム化、地球の砂漠化、文盲、失業、産業貿易構造、経済発展の格差、

累積債務、植民地主義、開発協力、など)

これからの南北問題を克服するための努力についての学習や方策についての研究

南北問題克服に参加する態度の養成とその行動化

…と言う説明がきよう。

■わが国における開発教育をめぐる主な動向

1977: 「新たな開発教育をめざして」(青年海外協力隊) 発行

1979: 開発教育シンポジウム(東京)
開発教育研究会発足

1980: 開発教育シンポジウム(横浜)
以降、81年/大阪、83年/名古屋

1981: 「開発教育ハンドブック」(中央青少年団体連絡協議会)

1982: 開発教育協議会設立
「開発問題学習カリキュラムの構造」シリーズ発刊
(開発教育カリキュラム研究会)

1983: 開発教育全国研究会(東京)
機関紙: 「開発教育」(第1号)発行
(開発教育協議会)

1984: 開発教育協議会、開発教育全国研究会(大阪)
以降、85年/名古屋、86年/横浜、87年/神戸、88年/神戸、89年/岡山

1987: 開発教育を考える会(外務省)実施

1988: 開発教育情報センター設立(開発教育協議会)

1989: 「開発教育ハンドブック(新刊)」作成(開発教育協議会)

わが国における開発教育に関する基本的な論文/出版物

■「開発教育に関するワークショップ」 国連合同広報委員会の提案
中央青少年連絡協議会「中青連ニュース」第76号、1975年10月、pp. 22-28

金谷敏郎 「開発教育とは何か」
青年海外協力隊「クロスロード」第16号(特集・開発教育を考える) 1979年10月、pp. 3-8

東和大学国際教育研究所 「新しい国際理解教育としての開発教育」
国際理解教育研究所「国際理解」第13号、1981年8月、pp. 9-20, 70

田中治彦 「青少年活動における国際理解・国際協力活動の現状と今後の課題 - 「開発教育」及び「国際教育」の観点から -」
東京大学教育学部紀要第21巻、1982年3月、pp. 247-256

室 靖 「「開発教育協議会」結成の意義と役割」
開発教育協議会「開発教育」第1号、1983年5月、pp. 1-4

開発教育カリキュラム研究会 「開発問題学習カリキュラムの構造」

(開発教育カリキュラム研究会報告Ⅰ)、日本YMCA同盟、1983年9月
開発教育カリキュラム研究会 「開発問題学習の目標と教材の分析」
(開発教育カリキュラム研究会報告Ⅱ)、日本YMCA同盟、1984年5月

田中治彦 「日本における開発教育の現状と課題」
日本教育学会 「教育学研究」第51巻第3号、1984年9月、pp. 296-307

日本ユネスコ協会連盟 「平和と開発 - ユネスコ活動ガイドライン」1984年6月、pp. 77-84

ユネスコ国際教育勧告 1974年
国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告 1974年 第18回ユネスコ総会
日本ユネスコ協会連盟 「地球に生きるみんな友だち」
- 国際教育ガイドブック - 1988年3月、pp. 30-35

「国際理解教育の現状と問題点」 - 他の先進諸国との比較考察 -
国際理解教育推進研究会 1988年6月
「開発教育協議会の進め方を考える」 全国

開発教育協議会推進研究会報告書

開発教育協議会／国際協力推進協会 1988
年 8 月

開発教育を推進するセミナー報告書

関西セミナーハウス／開発教育 1989 年 2
月

同 上 1989 年 6 月

国際協力推進協会／開発教育協議会 1990 年
1 月

田中義信 「開発教育のめざすもの」

NCC キリスト教アジア資料センター

「アジア通信」 NO.74 1989 年 8,9 月号、pp.
3-5

雨森孝悦 「開発教育のめざすもの」

国際協力事業団 「国際協力」

特集／地球市民を育てる－これからの「開
発教育」 1989 年 4 月号、pp.6-8

「国際教育ダイレクトリー'92」

日本ユネスコ協会連盟／国際理解教育・資料
情報センター (ERIC)

3. 「開発教育」など 「国際理解教育」、 「国際教育」を積極的に 実施している団体・ 組織

「開発教育」は先に述べたように、今も低
開発の状態におかれた「南」の発展途上国の
現状をなんとか改善するために、先進国側の
市民が何を学び、実際に行動すべきかを考え
る学習であると考えられるが、こうした「南」
の現実に積極的に目を向ける学習は、単に開
発教育だけのものではないと思われる。「国
際理解教育」を積極的に進めてきたユネスコ
の活動も近年の「国際教育」という新しい名
称のり中で、よりグローバルな視点から地球
の環境、開発の問題を考え、ひとりひとりの
人権、引いては社会の平和をもとめる国際的
な教育の必要性を訴えていることなどから、
かつての国際理解教育のような欧米文化を中
心とした異文化理解、国際交流といった単な
る表面的な国際理解に止まらない学習の方向
に向かいつつあることから、ある意味での
「開発教育」の視点が従来の国際理解教育に
も取り入れられつつあるという印象を持ちつ

つあつ。むしろ、「開発教育」の方が、教育
現場・関係者にとって馴染みのない名称であ
り、その名称から直接うける内容の誤解も伴
って、多くの教育現場への導入において障害
を持っているものと考えられる。従って、
「開発教育」の定義がまだ不十分であること
や実践の事例がまだ多く蓄積していないなど
の問題もあり、開発教育の真に目指すものを
明確に示せないこともあって、まだ「開発教
育」を「国際理解教育」のひとつと考えるひ
ともいる。しかし、オートリアのパーキン
ス氏が「開発」についての概念を定義してい
るように、人間が行為として行う「開発＝D
evelopment」が、保護、保全とい
うむしろ人の手を加えないことも「開発」の
ひとつの選択であるという広い意味での人間
社会の開発問題の真の意味を考えるならば、
どのような「開発」の価値観に基づいて地域
を、国を、地球をデザイン＝開発していくか
という壮大なテーマを持った場合、ひとりひ
とりの人間の生き方、ものの見方、あるべき
価値観を高め、理想的な人間社会をつくるた
めには、「開発教育」は従来の教育が持て得
なかった学習の材料を提示できるものになる
はずである。これにはまだ、時間がかかるが、

「開発教育」にはこうした単に途上国の低開発の問題にのみ焦点を当ててではなく、むしろ我々、先進国側の人間の生活が途上国の現実と深く結び付いていることを認識した上で、我々の生活そのものを見直し、また、より経済的ばかりではなく、精神的文化的にも豊かな社会をつくるための知恵を学んで行く必要がある。

■開発教育協議会／開発教育情報センター

開発教育に関するわが国初の全国的、連絡・交流組織。82年に設立。20数団体の団体会員と300名を超える個人会員によって構成されている。事業は主に春の総会、夏の研究会、実践セミナー、推進セミナーの開催、さらに年、4回の機関紙、「開発」の発行、数々の開発に関する実践マニュアルの作成、刊行などを行う。付属の機関に「開発情報センター」を持ち、関係資料の閲覧、リソースパースンの紹介などを行ない、最近では開発教育に関する基本図書100冊の選定を推めている。

事務局と情報センターの所在は同じ。

〒169 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-61

Tel. 03-3207-8085 Fax. 03-3207-0226

■日本クリスチャン・アカデミー関西セミナーハウス

開発教育を関西地区を中心にして精力的に実施している。89年度より開発教育推進セミナーの開催、開発教育教育資料集の発行、欧米の開発教育の教材・資料の収集・開発、訪米の開発教育先進国へのスタディーツアー、アジアへのスタディーツアーの開催など、90年度からは積極的な事業を展開し、関西の開発の情報センター的役割を担いつつある。

〒606 京都市左京区一乗寺竹の内町23

Tel. 075-711-2115

その他にも、「開発教育」に関する資料の収集・研究を行っている団体・研究室に、東和大学国際教育研究所 (03-3834-3483)、国際協力推進協会/APIC (03-3504-2085)、(財)日本ユニセフ協会 (本部03-3355-3221、関西事務所、06-371-8582)、日本国際交流センター・アジア・コミュニケーション・トラスト/ACT (03-3446-7781)、岡山大学教育学部田中治彦研究室 (0826-52-1111、内線366)、神奈川国際交流協会/KISコーナー (045-671-7012)がある。他にも、日本YMCA同盟 (03-3203-0171)や都市YMCA国際事業担当部門、特に熊本YM

CA、広島YMCA、神戸YMCA、大阪YMCA、京都YMCA、横浜YMCA、東京YMCA、とちぎYMCA、仙台YMCA、北海道YMCAなどにもある程度の資料・教材が置かれている。

また、開発教育に関連して、「国際教育」、「国際理解教育」についての情報の収集、研究、教材の開発を行っている団体に、日本ユニセフ協会連盟 (03-3340-3921)がある。また、アメリカの数学者であり建築家であるB・フラーが考案したワールドゲームの国内での総代理である広島のシナジェティック研究所 (082-241-1609)も89年より実際にワールドゲームを実現させ、グローバル・エデュケーションの担い手としての役割を担いつつある。

最後に、国際理解教育・資料センター (ERRIC) (03-5885-1177)は、広く国内外の開発、平和、人権、環境、異文化理解、未来教育などの情報を収集し、楽しく、しかも気軽に実施できる授業案、活動案を提供している。「エリックニュースレター」を発行。また、日本ユネスコ連盟と共著で『国際教育ダイレクトリー'92』を発行している。

4. 学校における「開発教育」の実践のたねに積極的に関与する団体・グループ

グループ

わが国に置ける開発教育の導入が主に社会教育、特に青少年団体の活動やマスコミの特集記事、国連関係の広報、外務省系の団体からなされた経緯もあって、学校に置ける開発教育の実践はきわめて遅かったと言える。さらに、以下に紹介される開発教育の学校での実践の担い手たちの多くは、こうした青少年団体などの社会教育との関係を持つ、ボランティアなどに関わりを行って来た教師たちが少なくない。しかし、わが国で初めて「開発教育」の名が登場するのは、青年海外協力隊が1977年に作成した現行の学校教科書におけるア・アフリカなどの途上国がどの程度の量と内容で紹介されているかをレビューした冊子、「新たな開発教育をめざして」である。言うなれば、「開発教育」のことが初めて用いられたのは、学校教育に対してであるということができる。

こうした中で、学校教育において初めて本格的に「開発教育」の視点からカリキュラム

の開発・検討、資料の収集を行ったのが、開発教育カリキュラム研究会（国立教育研究所／国立教育研究所名譽所員：大野連太郎）である。開発教育のわが国での導入を精力的に推進した、金谷敏郎（当時、国立教育研究所）らを中心にした、教科教育、社会教育、学校現場教師などの専門家で構成した研究会が作られ、数冊の「開発教育カリキュラム研究会報告」を作成している。言わば、これが開発教育の学校への導入になったと言える。当時、特に高等学校の教育課程に「現代社会」が登場し、地球規模で進行する環境問題、人口問題、開発問題、援助・協力などを学校での学習で扱う必要が生まれ、その実践へのヒントとして「開発教育」がまさに、時を得たものとして登場した。しかし、他の教育段階、小学校や中学校での既存の教科内での「開発教育」の実践を考慮した場合、この研究会が作成した開発問題学習カリキュラムは独立した教科としての構成が強く、きわめて綿密に検討されたカリキュラムが独自の教科書、副読本の作成までは至らず、予想以上にはこのカリキュラムは利用されなかった。しかし、現在でもそのカリキュラムの構成や教材の分析は部分的にも実践に有効な手立てとして利用

され、報告書の入手を求める声も多い。

こうした基礎的カリキュラムの作成とは別に実践の面から開発教育の学校、社会教育における多くの教師を含んで授業実践・経験の交換や基本的概念の理解などの学習会が東京地区で約40名の会員を得て、開発教育実践研究会／DESA（1983-86 / 現在、岡山大学教育学部助教授：田中治彦 代表）が実施された。この会からは、現在、様々なところで活躍する開発教育の実践を生み出し、言わば「開発教育」の導入者の人々を第一世代とするならば、わが国の開発教育の第二世代を輩出した学習会と言うことができる。DESAは85年にそれまでのわが国における開発教育に関する基本論文を収集した「第三世代と日本の教育・開発教育基本文献集Ⅰ」を出版し、より多くの実践者を増やすべく活動を続けた。その後、田中治彦の岡山転勤に伴い、DESAは休会するが、3年後の88年には再び東京地区の開発教育に関心を持つ主に大学生から青年層を中心にした新しい新開発教育実践研究会／NEW-DESA（1989- / 現職：義塾ニューヨーク学院教諭：太田 弘 代表）が多くのDESA再開の希望を受けて再び実施された。NEW-DESAでは、新たな教

師たち、社会人などが集まり、旧 D E S A が開発教育の基本学習を中心にしたのに対して、さまざまなフィールドへ出かけ、体験する学習会を多く企画し、また、教科も今までの社会科ばかりではなく、英語、音楽、国語科における開発教育の実践の可能性を探る学習会を開催してきている。現在、会員は 80 名を越え、代表の転勤に伴う、今後の体制が検討されている。

また、学校における開発教育の実践で地道に努力しているグループに「開発教育を考える会」(都八王子市由木中学校教諭：田井香里 代表)がある。これは主に青年海外協力隊の O B / O G 達による学習会で、このグループが作成した開発教育の教材キット、「地球の仲間たち」(パート I、II)がその内容の良さと、利用頻度の高さで多く評価を受けている。協力隊の O B / O G 達の多くは、体育、美術、音楽、英語などの技能系が多く、開発教育の内容に近いとされてきた社会科などが少なく、ある意味での「開発教育」の真のねらいを伝えるグループとして際立った光を放っている。

先に紹介された開発教育協議会(東京都新宿区西早稲田)にはその 4 割近くの会員に学

校の教員がいて、開発教育の学校への導入に関する指針、方法などのノウハウを求める声が多く、もうひとつの会員層である N G O / 社会教育分野との兼ね合いが問題として残っている。協議会は本来、連絡・交流組織として機能すべきであるが、より実践的な方法論も今後積極的に事業の内容に取り入れられる必要がある。その試みとして、89 年秋に新潟県で協議会の主催による「開発教育実践セミナー」が実施され、集中的な学習会を実施することによって、より多くの開発教育実践者の育成につながることが開始された。

学校教育における開発教育の普及に力を発揮する団体に(財)日本ユニセフ協会がある。全国の「ユニセフ学校募金」を通して、教材の貸し出し、募金のフォローアップ、講師の派遣、「ユニセフ・ニュース」などの定期的な出版物の配布、シンポジウムの開催など、きわめて積極的に事業を展開し、単に募金という集金業務のみに終わらせず、募金に協力することともたちや家庭への啓発業務を行っている。

最近、日本クリスチャン・アカデミー関西セミナーハウスには、関西地区の私立、公立の様々な教科の学校教員が定期的なセミナー

ハウスのセミナーに参加するようになり、開発教育の実践に向けての学習会、教材の分析、作成などを行っている。今まで、開発教育は東京地区の青少年団体や学校教員に限られた活動としての要素が多かったが、今、このセミナーハウスの開発教育事業には、目を見張るものがある。90 年春に実施された、学校教師による西ドイツ、スイスの開発教育セミナーに続いて、90 の夏には学校教師によるアジアスタディーツアーの開催も計画され、学校教育における開発教育の西に拠点になりつつある。

また、既存の学校教育関係の学会において、田中治彦が日本教育学会や平和教育学会で開発教育に関する実践研究の発表を行って来たが、一方で、教科教育において最も開発教育の思想が導入しやすい教科の地理教育において、太田 弘は日本地理教育学会の中に「第三世界に関する地理教育研究グループ/ (事務局：愛知教育大学助教授 寺本 潔)」を設け、従来の伝統的な地理教育の中に、どのようにすれば、開発教育の視点から地理学習が展開できるかの可能性を見付け、全国的学習会を開催している。また、同じく全国的な地理学に関する学会である日本地理学会に

も、欧米の地理教育の中に「開発問題」に関する視点が多くあるにも拘らず、わが国の地理学の学術研究にそうした視点が少ないことを指摘して、同学会内に「第三世界の地理研究グループ／事務局：一橋大学教授 古賀正則）」が設置され、開発教育に関する学習会も実施されている。

このように、やっと最近になって初めて、「開発教育」の名は学校教育とその周辺にも見られるようになったが、まだ、多くの誤解とともにその知名度は低い。今後ともより具体的な実践の事例とともに、様々な場面で「開発教育」の学校教育における必要性を説いて行く必要がある。

5. 個人による学校現場における授業実践や教材の開発

学校における開発教育の事例はまだ、多くはなく、むしろ現時点では、個々の教師の教材の開発、授業実践の記録などしかないのが実情である。以下に、この数年の間に報告されている学校における開発教育の事例について簡単に紹介したい。

〔社会科〕

最も開発教育の内容に近い科目であると考えられるが、一方で教科内の伝統的壁も厚く、開発教育を単に途上国理解、海外援助の視点のみでカリキュラムを作成しようとする時には無理が生じることがある。社会科の中では、途上国学習や国際経済の学習、さらには地球環境に関する学習において開発教育とも言える実践が多く見られる。その意味では地理、公民、現代社会、政治・経済などでの実践事例が多い。

まず、83年の「開発問題学習カリキュラム構想」、「開発問題学習の目標と教材の分析」に関して、積極的に参加した者に太田 弘（当時、慶應義塾普通部）／平林俊彦（当時、

東京都杉並区立久我山小学校）／渡辺寄喜（当時、東京都立清瀬高校）などがある。その後、太田 弘は中学校の地理学習における世界地理の地誌学習を開発教育の視点からまとめたカリキュラムと指導案を作成して多くの社会科関係の研究会で報告している。また、最近では、社会科教育の分野で授業づくりを中心に実践研究を続けてきた大津和子（兵庫県立東灘高校）が「一本のバナナから」と題する現代社会での授業実践を報告し、バナナやエビという、わたしたちの身近な日常生活で何気なく使っている「もの」から、私たちとアジアとの関係、引いては南北問題の構造などのしくみを学習する授業づくりを試み、また、88年からの2年間には、兵庫教育大学の修士課程に在席し、開発教育やグローバル教育に関する論文をまとめ、欧米の開発教育、国際教育との関連についての調査をも実施している。また、木村一子（元広島大学教育学部付属福山中高等学校）は広島時代にフィリピンへのスタディーツアーの経験を生かし、現在の中京地区でアジア保健研修所（AHI）という医療協力NGO（民間団体）とタイアップし、アジアに関する地理・現代社会での授業を作成している。さらに、平和教育との

関連からアジアの人権などに取り組む原 真也（立教中学）や地理教育では、ラテンアメリカの地誌学習で伐採による熱帯林の減少やアンデスに住むインディオの生活を学習する授業を展開する酒井喜八郎（名古屋市立大江中学）が積極的に新しい地理学習の授業例を作りつつある。

小学校の段階では、岸屋祐二（聖心女子学院初等科）が6年生の世界学習においてアメリカ学習を新聞の切抜きを教材に利用して授業を展開するなどの試みをし、また、木崎克昭（東京都江東区立第一亀戸小学校）は、学校募金などの校内行事と社会科学学習に積極的なアジア地域をテーマにしたものを盛り込んだ授業を展開している。さらに、最近では、大学の社会科学教育の授業研究の分野にも開発教育に関するものが多くなり、特に筑波大学大学院修士課程教育研究科では、毎年数名の修士課程の院生が開発教育をテーマにした授業研究を発表している。タイの農村の開発問題を教材にした羽佐田透一、国内の年々増えるアジアからの労働者の問題を教材化する生地 陽や高橋健司など、確実に社会科の分野でも開発教育に関心を持つ若い教師の卵たちが増えている。

〔英語 系斗〕

英語はむしろ、国際理解や文化の相対的な認識など、むしろ開発教育のめざす豊かな価値観を形成することをめざす開発教育にきわめて近いところにある教科のはずだが、あまり、今まで開発教育の実践事例の報告は出てこなかった。それは、日本の英語教育の目標が主に、語学として学習、つまり背景に在る文化理解よりも翻訳としての技術の習得、入試必修科目などの観点から文法、語彙、英作文などとむむむる機能的に優先する指導が多く取られてきたことがその原因と考えられよう。しかし、近年、確実に英語を通して世界を学び、地球の問題、アジアやアフリカの現実や豊かな文化を学ぼうという意図をもって授業づくりをする教師も増えてくるようになった。例えば、島山廣子（岩手県矢巾町立矢巾中学）は、前任校での国際理解教育でAET S（補助英語教員）として派遣されているアメリカ人の教師たちと環境問題、平和問題を中心にした学習を実施していたり、また自身の青年海外協力隊での経験を英語教育に反映すべく、生徒たちに様々な英語の総合力の付く学習をおもにアジアなどの国を題材に作成する伊東直子（現・東京都豊島区道根中学）

や、グローバルな観点から英語教育を刷新しようとしている本村真吾（横浜市立永取沢中学）や古賀純子（菊池郡西合志中学）、岩崎裕隆（追手門学院大手前中学校）、豊田勝雄（同志社中学）もいて、これからの英語教育における開発教育の実践が期待される。

特に、英語教育において今後の開発教育にとって特筆すべきことは、日本にいる多くの外国人英語教員がきわめて高い関心を開発問題や環境問題、平和問題に持っていることが上げられよう。現在、多くの欧米の開発問題、環境問題を扱うNGOとの連絡をとりつつ、日本にもこうしたネットワークとアクションが必要だと説くキップ・ケイツ（鳥取大学教養部）や自身も長良川の環境を守るために自然保護の運動をしたり、地域の開発問題に関心をもちつつ英語の教鞭を取るシドニア・アトキンス（大谷女子短期大学）などは、こうした人材の好例であると言える。教科書の点では、むしろ社会科などでは、さまざまな内容的にはまだ、断言のできないことからも、トピックとして扱えるという観点では、英語の教材には、例えば酸性雨の問題や熱帯林の破壊など、さらに核兵器の恐怖などを取り上げられ、特に「三友社」のCOSMOSなど

のように、むしろ、開発教育の目さえ教師にあればきわめて深く授業が展開できる場面を多く持っている教科書のひとつであると言える。

その他、他の教科でも開発教育に関心を寄せる教師たちが多く、既存の科目の中でどのような実践ができるかを検討する研究会も次々にはじまりつつある。

〔国語科〕

武田尚子（東京都立府中高校）…国語科における開発教育研究グループ

〔理科〕

石田 進（京都市立紫野高校、地学）…地域のNGOの活動を支えつつ授業にあたる。

〔美術科〕

臼井香里（東京都八王子市市木中学校）…生活画の学習を通して開発教育を実践する。

〔音楽科〕

野田宏入（元慶應義塾普通部）…民族音楽を教材に音楽の文化的な相対性を学習する。

森茂岳雄（武蔵野音楽大学）

〔国際女子教育〕

棚橋和正（東京都港区立港南小学校）…国際感覚の鋭い子供たちは開発教育への理解者

〔国際理解教育・日本語教育〕

吉田新一郎（国際理解教育・資料情報センター）
従来の既存の分野から開発教育に入る。

岡 憲司（手塚山学院泉ヶ丘中学校）／加戸

玲子（筑波大学大学院修士課程教育研究科）

〔開発・平和教育〕

小池基信（同志社国際高校）…広い意味での開発教育をめざして。

小貫 仁（埼玉県立川越南高校）

〔生涯教育／青少年教育〕

松下俱子（文部省生涯教育課）…学校と社会教育との連携とを求めて研究する。

田中治彦（岡山大学教育学部）

〔開発教育〕

金谷敏郎（国立教育研究所国際教育協力室）
…開発教育の基本的な理論と実践の検討

赤石和則（東和大学国際教育研究所）

〔国際関係論〕

鴨澤 巖（法政大学）…開発教育を政治学や地理学への新しいチャレンジとして

古賀正則（一橋大学）

内藤正典（一橋大学）

高柳彰夫（一橋大学大学院法学研究科院生）
古田成樹（慶應義塾大学大学院政治学科院政生）

UTE: 龜山度子

岩手県・下閉伊郡・川村・小国中
紫波郡・矢巾町・矢巾中

[illegible]

3. 英語教育の現場から

「みんな地球の仲間たち」
——世界と自分のつながりを考える授業——

はじめに

私は1988年から1988年までの2年間、インド洋に浮かぶ島国、スリランカへ青年海外協力隊の一員として赴任した。人々と共に働き、生活を共にする中で、本場にいろんなこと、いろんな出会いがあった。決断していいことばかりではなかったけれど、私はその中でスリランカの人達にいろんなことを教わったように思う。

豊かな自然の中でその恵みを受けながら、貧しくても豊かに暮らす姿や、過度の便利さを求めずあるものでなにかやっていくつましい生活の仕方、家族や友人との時間を大切に過ごす豊かな生き方等——そしてその中で、本場の豊かさというものはGNPだけでは決して計れないことを知ったように思う。と同時に、やっぱりまだ人間が人間らしく生きることでできない現実も本場にあるのだ、というとてもいろんな場面で感じてきた。

帰国して教員となり、今は忙しいながらも何とかがやっている。だが、子供たちと接する中ですごく感じていたことがあった。それは国際化時代と言われながらも、日本の子供た

ちはまだまだ本場の地球の現実からすごく遠いところにいるのだな、ということである。私がスリランカ帰りと知ると「土人にとって食われなかった?」、スリランカから送られてきた子供の絵の展示を見て「要はお金があればいいことでしょ」……

この豊かな日本に普通に暮らして居ると、地球の上にはいろんな人がいてそれぞれのところでもみんなが必死に生きている、ということを知れる機会も少ない。また知ったとしてもどうしても「遅れていて貧しいアジア」とか「日本は豊かでよかった」といった認識になってしまふ。

日本の子供たちも日々忙しい毎日を送っている。身近に切実な問題があったりして、それぞれに大変なことと思う。でも、だからといって自分の目の前だけ見えていてよい、ということではないと思う。今、この同じ時に同じ星の上で生きている仲間を意識し、大きく目を開いてその仲間たちを見てほしい。そして、仲間たちが今どういう状況にあるか、同じ気持ちで感じてほしい。

これが私がこの授業を始めたきっかけである。前任校での取り組みの中でもう2年前のことになるが振り返ってみたい。

実践から

1. 授業の概略

- ・学校：東京都内私立中学校
- ・学年：中学3年（男女・約40名）
- ・授業：週1時間の選択授業（英語講読） - 2クラス
- ・生徒の状況：選択授業ということもあり英語に興味があり、比較的学力も高い生徒が集まっていた。

2. 授業のねらい

「世界と自分のつながりを英語学習を通して考える」ことをねらいとした。

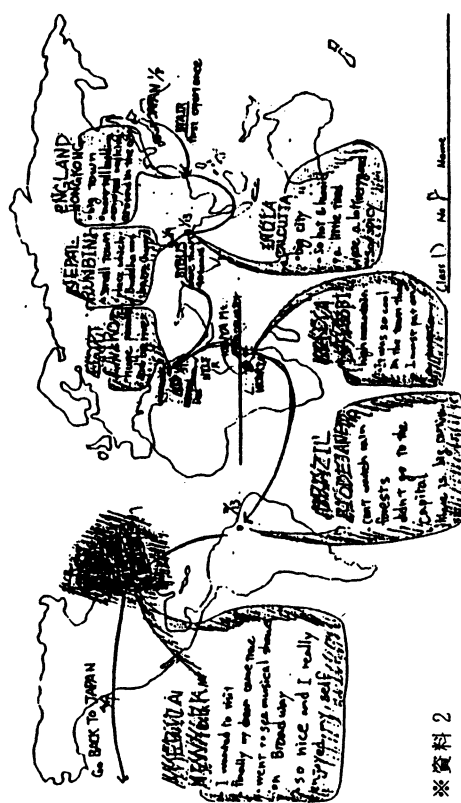
又、授業を組み立てるにあたって、このねらいを次のように段階的に考えていった。

* 第一段階：

世界を身近に感じること。世界にはいろんな国があり、そこにはいろんな人達が住んでいるということをもまづ知ってほしい。

一菜烟※

あいご 英語 (作: スザナカ)	ちやうど 中国語 (中国・台湾)	タイ語 (タイ)	シンハラ語 (スリランカ)
Hello. ハロー	你好 ニーハオ	สวัสดี ซアワดี	සමගුණයි サマ・グン・ヤイ
My name is 〇〇. マイ ネム イス 〇〇	我是 〇〇. ワイ シ 〇〇	ဒါ ဇာန် ဇေ-〇〇	මම මම 〇〇. マ・マ 〇〇
Thank you. サンキュー	謝謝 シエ シエ	ဘဝဉာဏ် ကိုဘျက်	දුටුවෙයි ド・ウ・ベ-ヤイ
See you again. スィーユー アゲイン	再見 ワキアヒン	အဆုတ် ဘာဘို	පැයවෙයි ハヤバ・グン
スワヒリ語 (ケニア)	スペイン語 (スペイン)	ポルトガル語 (ポルトガル)	
Jambo ジャンボ	Hola ホーラ	Boa Tarde ボア タルデ	
Jina Language 〇〇. ジナ ランゲ 〇〇	Me llamo 〇〇. メ ジャモ	Meu Nome E 〇〇. メウ ニミ エ	
Asante アサンテ	Gracias グラスィア	Obrigado (男) オブリガド Obrigada (女) オブリガダ	
Kwaheri クワヘリ	Nos vemos ノス ヴェモス	Ate logo アテ ロゴ	
☆☆☆	☆☆☆		
こんにちは けにしのなまえは 〇〇です ありがとう またあいましう	こんにちは けにしのなまえは 〇〇です ありがとう またあいましう		



2 料 質 ※

3. 授業づくりの方

授業をつくるにあたっては次の3つを大切なポイントとして考えた。

- (1) おもしろいものであること。
①教材の点から：

子供が楽しく活動する中で問題意識が持てるように、又、ありきたりの授業にしないためにも、ありとあらゆるものを取り上げていった。

その際、世界一周旅行など、子供の興味をひきたい共感を得やすいものを選んだり、アメリカにも寒いところがある、といったような驚きのあるもの、言いかえれば固定観念を打ち破るような物を選んでいった。又、教科書の壁を越えて、英語で数学や社会をやる等、こどもにとっても新鮮なものを心がけた。

- ②やり方の点から：

Reading & writing が中心となったが、その中にクイズやゲーム、歌やビデオを取り入れられたり、地図や表を作る・色をぬる等の作業をさせたりしていた。特にこの作業のあるものは子供たちは喜んでやっていた。

＊第二段階：

世界にはいろんな文化や生活習慣があるが、「自分たちと違う」ということが「劣っている」ということではないということを理解すること。違いを違いと認める気持ちを持ち、その上で人間として同じなんだということを感じてほしい。

地球の現実としていろいろなことが起こっていることを知ること。同じ地球に住む人々が今困っている状況にあるかも知れないことを知ってほしい。

＊第四段階：

それらのことが、自分とどのようなつながっているか、自分に何が出来るか、ということとを考へること。そこから、自らの暮らしや価値観を振り返り、見直していくということと出来るまでできれば良いと思う。

又、それが、自らの行動へとつながっていく。英語学習という枠を越えた本当の学習になることと思う。

※資料 3

11월 14일 [화]

50音のハングル表記, 鼻音化 <2>

제26과

第26課

- ① 日本語をハングルで表記する場合の原則を以下に示しておきます。韓国と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）とで多少違いがあります。

アイウエオ		ヤユヨ
ア	行	야유요
	語頭	가기구게고
	語中	카키꾸케코
	語末	까꾸꼬
イ	行	사시스세소
	語頭	다지즈데도
	語中	타치즈테도
	語末	따찌즈뎀도
ウ	行	나니누네노
	語頭	하히후헤호
	語中	마미무메모
	語末	마뎀모
エ	行	라리루레로
	語頭	와이우에오
	語中	가기구게고
	語末	자주조
オ	行	자주조
	語頭	다지즈데도
	語中	바비부베보
	語末	파퓨포
カ	行	파퓨포
	語頭	바비부베보
	語中	파퓨포
	語末	파퓨포

(1) 語頭の濁音
この言語では、語頭に濁音が立たないので、平音で表記されます。
銀座 긴자 善光寺 전코지<정코지>
(2) 長音
' 長音は表記しないのが標準的ですが、同音を重ねる方式も見うけられます。
大阪 오사카 <오사까>~오오사카
後藤 = 江東 고토 <고또>
野田 = 納田 노다
(3) 促音 (つまる音) 「ッ」
韓国ではパッチムの人で表記しますが、北朝鮮ではカ行の前でㄱ, サ行・タ行の前でㅌ, パ行の前でㅍを書きます。
北海道 홋카이도 <홋까이도>
新田 닛다 越中 옛추 <옛쑤>
札幌 삿포로 <삿뽀로>
(4) 撥音 「ン」
韓国では常にしですが、北朝鮮ではカ行・ガ行の前と語末でㅇ, マ行・パ行・バ行の前ではㅇ, その他の場合はㅇを書きます。
本郷 본고<봉고> 瀧波 난비<남비>
群馬 군마<굼마> 安藤 안도
西陣 니시진 <니시진>
1986年3月号87頁) に記されたものからお借りしたものです)

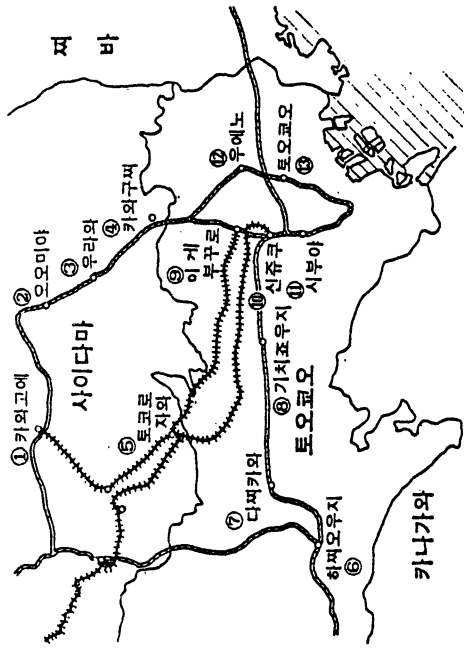
22 (나쁘고) 23 (나쁘고)

- (2) 考えるというプロセスを大切にすること：
その教材についての感想を書かせる、英問に答える形で自分なりの意見を書かせる、主人公になったつもりで話の続きを作らせる、等、できるだけ考えて自分の意見を言うチャンスを作っている。(英語・日本語)
(3) 力がつくものであること：
講読のクラスであったため、「読む力をつける」ということに重点を置いた。特に「英A

4. 取り上げられた題材とその内容：

題名	題材・内容	ねらい
1. 1学期 - 1 世界一周旅行 資料 1	クジに国名や地名を書いておいてそれを引かせる。席を発表する際地図で場所を紹介する。例) America, Bombay, China, Denmark, England, France, etc. (こうすると席の発表は最初の文字だけでよい。)	第一段階
1. 世界一周旅行 資料 2	世界一周の紀行文 (地理の教科書などを基に自作) を読ませその足跡・内容を地図の上に記録し報告書を作らせる。文中に地名をはっきり入れて探させてもいいし、I visited one island. That was in longitude 116 degrees east and on the equator. といった地理的な表記から探させてもよい。(次に読む話の国を入れておくともよい)	第一・第二段階
2. アジアの笑い話 (2-3回)	"Laughing Together" より1回で読み切れる話を選んで読ませ質問に答えさせる。導入にその国の民芸品や写真等を利用する。	第一・第二段階

3. アバルトヘイトについて	『たまちゃんや南の人びと』の中の「人間が人間を差別するなんて」を英訳して読ませ疑問に答えさせる。身の回りにある南アよりの輸入品を見せ、それが南ア政府を支えていることを理解させる。最後に南ア人民の国歌である「ンコシシケレリアフリカ」(アフリカに神の祝福あれ)を聞かせる。	第三・四段階
4. ビデオ『アシナマリ』	反アバルトヘイト黒人音楽劇『アシナマリ』(NHK教育で放送分を録画)を見せる。ネルソン・マンデラについてTIME誌等を見せ説明。4・5を通して感想を書かせる。(その他「遠い夜明け」『サラフィナの声』等)	第三・四段階
ー2学期ー *席がえーハングル文字 資料3	クジにハングル文字1文字を書いておき、引かせる。ハングル語で東京地名当てクイズを行う。	第一段階
1. 時刻表クイズ 資料4・5	Thomas Cook European Time Table の索引地図と必要ページをプリントにして渡しクイズに答えさせる。例) What time should we leave Paris to arrive at Nice by 18:00? 等。自分でItineraryを作らせてもよい。	第一段階
2. アンネの日記	アンネ・フランクの紹介文、及び“The Diary of Anne Frank”の一部を抜粋して読んで質問に答えさせ、感想を書かせる。当時の背景、ナチスとユダヤ人等について説明する。	第二・三段階
3. Children in the World 資料6	世界中の子ども3〜4人から来た家族・学校・暮らし等を紹介した手紙(似顔絵等も入れるとよい)を読み、その内容を一覽表(又は地図上)にまとめさせる。自分についても加えさせる。内容はスライド教材『地球の仲間たち』等に登場する子供達を参照して作る。この後、実際に登場させた子供たちの生活のスライドを見せるとよい。活字の上だけだった外国の友達が、実は真在している、同じ地球で今生きている、ということを感じ取るよい機会になるだろう。その後その内の一人に対して返事を書くつもりで自己紹介の手紙を書かせる。	第二・三・四段階
4. 算数・数学の文章問題 資料7・8	英語で書かれたArithmetic 又はMathematicのThought Problems (文章問題)を解かせる。導入で学校教育を英語でも行っている国(英・米・カナダ・ガーナ・ケニア・香港・パプアニューギニア等)を紹介し、本物の教科書を見せてその国の生徒になっただけでもやりさせる。どれか1か国を3.で登場させておいてもよい。	第一・二段階
5. 歌 “Happy Xmas”	John Lennon の “Happy Xmas” を dictation (or spotted dictation) させる。 “For black and for white/for yellow and red ones/Let’s stop all the fight” について言及し問題提起をする。みんなで歌ってもいい。(歌を “Imagine” にして6.につなげてよい。)	第二・三・四段階
6. ビデオ “Imagine” 資料9	main storyを追って短くしたものを見せる。5・6を通しての感想を書かせる。	第一・二段階
ー3学期ー *席がえー世界おもしろクイズ 資料10	世界の人々の暮らし等についてのクイズを出して解答用紙に○をつけさせ、1問毎にどれに付けたか挙手させ正解を言っていく。5問程出し正解の多い人から好きな席が取れることにする。『地球の仲間たち』や “Charlie Brown’s Fourth Book of Questions and Answers” 等を参照して作る。	第一・二段階
1. 外国の教科書の中の日本 資料11	外国の社会科(歴史・地理)の教科書に書かれた、日本に関する説明文を読んで、日本がどのように紹介されているかを知るとともに、日本を客観的に見る機会とする。又、内容について思っていたことを書かせる。	第二・三・四段階
2. マザー・テレサの言葉 資料12	“A Gift for God” からマザーの言葉や来日時のエピソード等を読んで質問に答えさせたり、言葉の一部を訳させる。又、それについての感想を書かせる。	第三・四段階
3. ビデオ 資料13 “We Are the World”	“We Are the World – the story behind the song” を見る。 この作品、又は年間を通じての感想を書かせる。	第一・二・三・四段階



ハングル文字の地図!

日本のあるところの地図です①～⑮までの
ハングル文字で書かれた町の名前を3つ当て
てください

ヒント

아 (あ) 이 (い) 우 (う) 에 (え) 오 (お)
가 (か) 기 (き) 구 (く) 계 (け) 고 (こ)

ハングル文字に挑戦 こたえ
① 川越 ⑤ 八王子 ⑩ 渋谷
② 大宮 ⑦ 立川 ⑪ 上野
③ 浦和 ⑧ 吉祥寺 ⑫ 東京
④ 川口 ⑨ 地蔵
⑥ 所沢 ⑬ 新宿

GREAT BRITAIN-510

Table 510 LONDON - SOUTHAMPTON - BOURNEMOUTH - WEYMOUTH 1,2 class BR

km	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663	664	665	666	667	668	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783	784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820	821	822	823	824	825	826	827	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839	840	841	842	843	844	845	846	847	848	849	850	851	852	853	854	855	856	857	858	859	860	861	862	863	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875	876	877	878	879	880	881	882	883	884	885	886	887	888	889	890	891	892	893	894	895	896	897	898	899	900	901	902	903	904	905	906	907	908	909	910	911	912	913	914	915	916	917	918	919	920	921	922	923	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934	935	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959	960	961	962	963	964	965	966	967	968	969	970	971	972	973	974	975	976	977	978	979	980	981	982	983	984	985	986	987	988	989	990	991	992	993	994	995	996	997	998	999	1000	1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020	1021	1022	1023	1024	1025	1026	1027	1028	1029	1030	1031	1032	1033	1034	1035	1036	1037	1038	1039	1040	1041	1042	1043	1044	1045	1046	1047	1048	1049	1050	1051	1052	1053	1054	1055	1056	1057	1058	1059	1060	1061	1062	1063	1064	1065	1066	1067	1068	1069	1070	1071	1072	1073	1074	1075	1076	1077	1078	1079	1080	1081	1082	1083	1084	1085	1086	1087	1088	1089	1090	1091	1092	1093	1094	1095	1096	1097	1098	1099	1100	1101	1102	1103	1104	1105	1106	1107	1108	1109	1110	1111	1112	1113	1114	1115	1116	1117	1118	1119	1120	1121	1122	1123	1124	1125	1126	1127	1128	1129	1130	1131	1132	1133	1134	1135	1136	1137	1138	1139	1140	1141	1142	1143	1144	1145	1146	1147	1148	1149	1150	1151	1152	1153	1154	1155	1156	1157	1158	1159	1160	1161	1162	1163	1164	1165	1166	1167	1168	1169	1170	1171	1172	1173	1174	1175	1176	1177	1178	1179	1180	1181	1182	1183	1184	1185	1186	1187	1188	1189	1190	1191	1192	1193	1194	1195	1196	1197	1198	1199	1200	1201	1202	1203	1204	1205	1206	1207	1208	1209	1210	1211	1212	1213	1214	1215	1216	1217	1218	1219	1220	1221	1222	1223	1224	1225	1226	1227	1228	1229	1230	1231	1232	1233	1234	1235	1236	1237	1238	1239	1240	1241	1242	1243	1244	1245	1246	1247	1248	1249	1250	1251	1252	1253	1254	1255	1256	1257	1258	1259	1260	1261	1262	1263	1264	1265	1266	1267	1268	1269	1270	1271	1272	1273	1274	1275	1276	1277	1278	1279	1280	1281	1282	1283	1284	1285	1286	1287	1288	1289	1290	1291	1292	1293	1294	1295	1296	1297	1298	1299	1300	1301	1302	1303	1304	1305	1306	1307	1308	1309	1310	1311	1312	1313	1314	1315	1316	1317	1318	1319	1320	1321	1322	1323	1324	1325	1326	1327	1328	1329	1330	1331	1332	1333	1334	1335	1336	1337	1338	1339	1340	1341	1342	1343	1344	1345	1346	1347	1348	1349	1350	1351	1352	1353	1354	1355	1356	1357	1358	1359	1360	1361	1362	1363	1364	1365	1366	1367	1368	1369	1370	1371	1372	1373	1374	1375	1376	1377	1378	1379	1380	1381	1382	1383	1384	1385	1386	1387	1388	1389	1390	1391	1392	1393	1394	1395	1396	1397	1398	1399	1400	1401	1402	1403	1404	1405	1406	1407	1408	1409	1410	1411	1412	1413	1414	1415	1416	1417	1418	1419	1420	1421	1422	1423	1424	1425	1426	1427	1428	1429	1430	1431	1432	1433	1434	1435	1436	1437	1438	1439	1440	1441	1442	1443	1444	1445	1446	1447	1448	1449	1450	1451	1452	1453	1454	1455	1456	1457	1458	1459	1460	1461	1462	1463	1464	1465	1466	1467	1468	1469	1470	1471	1472	1473	1474	1475
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

* Solve the following problems.

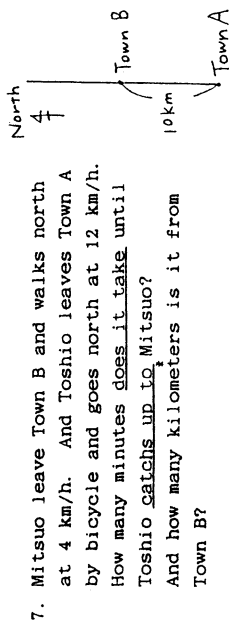
1. A train leaves Shibuya Station every 18 minutes. How many trains leave from 6:00am to 1:00pm when the first train leaves at 6:00am (including the first train)?
2. My friends came to my house and my mother gave us oranges. She gave the same number of oranges to 5 children and she still had 12 oranges. After that 3 other friends came, so she gave them the same number of oranges. Then she didn't have any oranges left. How many oranges did she have in the beginning?

3. There is a straight street of 180 meters in the park. We want to plant trees on both sides along this street every 12 meters. How many trees do we need (including the first and last trees)?

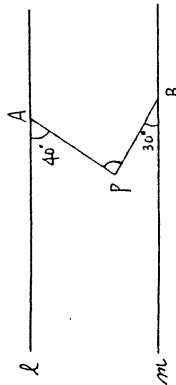
4. Kathy has 1.8 meter-long ribbon and it is three times the length of Kate's ribbon. June's ribbon is longer than Kate's ribbon by 15 cm. How long is June's ribbon?

5. The number of students of Akagawa Junior High School has increased 4% this year. The total number is 468 students now. How many students were there last year?

6. Four pencils and 3 notebooks cost ¥680. Six pencils and 5 notebooks cost ¥1,080. How much is a pencil? How much is a notebook?



7. Mitsuho leave Town B and walks north at 4 km/h. And Toshio leaves Town A by bicycle and goes north at 12 km/h. How many minutes does it take until Toshio catches up to Mitsuho? And how many kilometers is it from Town B?



IMAGINE

※資料 9

イマジン

John Lennon

Imagine there's no heaven
It's easy if you try
No hell below us
Above us only sky
Imagine all the people
Living for today...

Imagine there's no countries
It isn't hard to do
Nothing to kill or die for
And no religion too
Imagine all the people
Living life in peace...

You may say I'm a dreamer
But I'm not the only one
I hope someday you'll join us
And the world will be as one

想像してごらん 天国なんてないんだと.....
その気になれば簡単なことさ
僕らの足下に地獄はなく
天上にはただただ空があるだけ
想像してごらん すべての人々が
今日のために生きてしていると.....

想像してごらん 国境なんてないんだと.....
そんなに難かしいことじゃない
殺したり死んだりする理由もなく
宗教さえもない
想像してごらん すべての人々が
平和な暮らしを送っていると.....

僕を空想家だと思おうかも知れない
だけど 僕ひとりじゃないはずさ
いつの日か 君も僕らに加われば
この世界はひとつに結ばれるんだ

※資料 10

中国・台湾クイズ

1. 中国・台湾ではお正月は何月にお祝いするでしょう。

- ① 1月
- ② 2月
- ③ 3月

正解・② 2月

中国・台湾ではいわゆる「旧正月」をお祝いします。2月の27日か28日ごろになります。

2. 台湾ではお正月のときに街中でみんながすることがあります。それはどんなことでしょう。

- ① 音楽をかける。
- ② 爆竹を鳴らす。
- ③ 燈をかけあう。

正解・② 爆竹をならす。

日本では新年というところでも静かなものですが、台湾では街のあちこちで爆竹を鳴らし、とてもにぎやかにお祝いします。

3. 台湾でお正月によく作る食べ物は何でしょう。

- ① シューマイ
- ② 春巻
- ③ ウィンナーソーセージ

正解・③ ウィンナーソーセージ

正確には腸詰（ちようずめ）といっています。日本のウィンナーソーセージとちよつとちがいが、豚の腸の中にひきにくをつめた感じで赤っぽい色をしています。お正月前には家庭でも作るし、お店でも売ったりします。

スリ・ランカ クイズ

1. スリランカでは毎日の食事にカレーを食べます。では、次のうちどのカレーが一番ぜいたくな（高い）カレーでしょう。

- ① チキン（鶏肉）のカレー
- ② ビーフ（牛肉）のカレー
- ③ ポーク（豚肉）のカレー

正解・① チキンのカレー

日本とは逆に鶏肉・豚肉・牛肉の順に値段が高いため、鶏肉のカレーが一番ぜいたくなカレーになります。だから誕生日や家の新築パーティなどにはよくチキンのカレーを作ってもてなします。

2. スリ・ランカから日本に一番多く輸出されているものは何でしょう。

- ① 紅茶
- ② 砂糖
- ③ ココナッツ（やしの実）

正解・① 紅茶

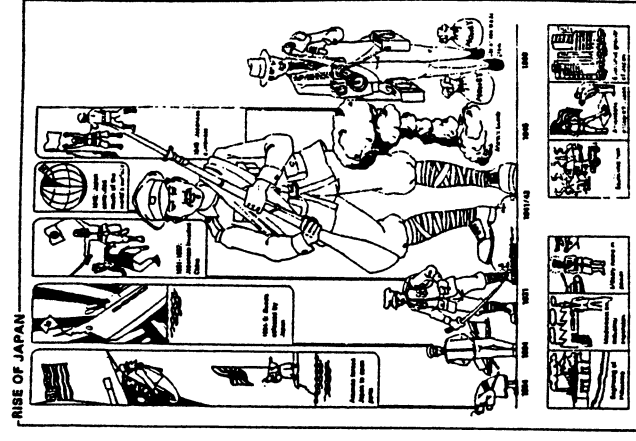
スリ・ランカの紅茶は「セイロンティ」の名前でよく知られています。世界でも最上品質の紅茶のひとつです。日本へはイギリスのリプトンやトワイニング等を通じて入ってくるものもあります。

3. 「スリ・ランカ」とはもともとどのような意味があるのでしょうか。

- ① 3つの島
- ② 輝く島
- ③ 小さい島

正解・② 輝く島

「スリ」とは、シンハラ語（スリ・ランカで多く話されている言葉）で「輝く」という意味です。「ランカ」とはもともとこの島の名前で、紀元前4世紀ごろのサンスクリット語の叙事詩『ラーマヤナ』でも「ランカ島」と呼ばれています。



※資料 11

マザー・テレサのことは

English Reading class: No: Name:

One day there was an old foreign woman on a train going to Osaka from Tokyo. She was looking out of the window. She saw a lot of cars, tall buildings, nice houses, big factories, etc. Then she drank water from a paper cup. After that, she put it into her bag. A Japanese woman sitting next to her wondered what she was trying to do with it. She was going to take it back to India, her country, and use it again. Her name was Mother Teresa. She visited Japan in 1981 and this happened when she got on a bullet train in Japan. ※新幹線. Her name is well known among many people all around the world now.

Japan has become a rich country. Almost every house has a car. There is a lot of food all the year around. We have a large number of books and magazines to read. But we have a problem here. There are lots of people who can't take good care of things. For example, some people throw away things even though they can be used more. You can find some furniture thrown away on the corner. Do you eat all the food served at restaurants or at home? We know that there are many people who have no food or no houses in the world and some of them are dying because of that.

In 1979, Mother Teresa was given the Nobel Peace Prize, because she helped many poor, sick people in the world. One day she said, "I feel angry when people throw away things which still can be used."
We have a lot of things, but we are losing something important in this rich country now. ※

class: No: Name:

*Answer the following questions:

1. Why didn't she throw away the paper cup?
 2. What do people throw away in Japan?
 3. When did Mother Teresa visit Japan?
 4. What did she get in 1979?
- *Translate the underlined part into Japanese in your own way.
- *What do you think about it?

※資料 13

WE ARE THE WORLD

There comes a time when we heed a certain call
When the world must come together as one
There are people dying
And it's time to lend a hand to life
The greatest gift of all

We can't go on pretending day by day
That someone, somewhere will soon make a change
We are all a part of God's great big family
And the truth, you know,
Love is all we need

CHORUS:

We are the world, we are the children
We are the ones who make a brighter day
So let's start giving
There's a choice we're making
We're saving our own lives
It's true we'll make a better day
Just you and me

今こそあの声に耳を傾けるんだ
今こそ世界が一丸となる時だ
人々が死んでゆく
いのちのために手を貸す時がきたんだ
それはあらゆるものの中で最大の贈り物

これ以上知らん振りを探けるわけにはいかない
誰かがどこかで変化を起こさなければ
僕らはすべて神のもと大きな家族の一員なんだ
本当さ
すべての人に必要なのは愛なんだ

CHORUS:

僕らは仲間 僕らは神の子供たち
明るい明日を作るのは僕らの仕事
さあ今こそ始めよう
選ぶのは君だ
それは自らのいのちを救うことなんだ
本当さ 住みよい世界を作るのさ
君と僕で...

5. 子供たちの

感想から：

・いろいろな話を読めたのがよかった。型にはまった英語の勉強でなくて楽しかった。(多数)

・1年間、あっという間に終わってしまったような気がする。何か心に残るものがあった充実した時間だったと思う。

・After this class, I noticed that we must change our mind. Till now we have lost many many times, haven't we?

・日本ではいろんなものをすごく無駄にしている。それをやめて、その分お金をためて外国の本来に必要なところに使わなくてはいいなと思った。

・一番、心に残ることは「We are the world.」を見たことです。私もいつか青年海外協力隊でアフリカに行きたいです。

・さっと英文を見ただけで意味がほとんどわかるようになった。

・自分の意見を英語で書くのが難しかった。でも、けっこうおもしろかった。等

終わりに

年間を通じて「世界と自分のつながりを考える授業」というテーマで取り組んだわけだが、今思うことは、やはり、継続・積み重ねが大切だ、という事だ。せっかくの題材もいきなり出すのでは唐突になってしまい、生徒も面食らってしまう事があるだろう。少しずつ積み重ねて言って、奥に流れるテーマが少しずつでも伝わって行けば、いろんな事に取り組むことが出来るし、メッセージも伝わりやすいとおもう。又、時間をかけることで伝わることもあるのではないかなと思う。

この授業を通して子供たちにどのくらい伝わったかは本当にはわからない。が、いままぐ花開かなくとも、これからの彼らの成長過程で、いつかどこかで何かに出会った時にひらめくものがあれば・・・そんな風に願いつつ、少しずつでも子供の心に種をまいていきたいと思う。そして、また、こういう事が地味ではあるが、国際化というような言葉を超えて、真にみんなにとって住みよい、いい地球を作っていくのに役立つのではないかなと思っています。

英語力をつけるという点でも、大いに課題が残っている。ここでは「英語をそのまま読む」ということに力を入れ、英問英答によって読み取れているかの確認をしたものが多い。だからある意味では読ませっぱなしで、しっかり読み取るための指導、及び評価が不十分だったのではないかなと思う。又、それ以外の力をつけるという点も今後考えていかなくてはいいかなと思う。

この実践は前任校の私立中学で行ったものだが、現在動めているのはごく普通の公立中学である。週5～6時間英語の授業があり、それ以外に選択としても英語が取れるといった環境から、一変して週3時間の世界となった。学級指導・生活指導の合間を縫って教科書を終わらせるのが精一杯のこの2年間だったが、今後の週4時間体制も含めて今の学校でいかに取り組んでいけるかがこれからの自分の最大の課題だと思っている。

*補足

スライド教材

「地球の仲間たち」パート1・パート2：

青年海外協力隊のOB・OGで帰国後教壇に立つものを中心とした集まりである「開発

教育を考える会」が、子供たちに外国の当たり前の暮らしを知ってもらうことを目的として制作したスライドキット。「パート1」は「食べる・着る・住む・子供たちの生活・いろいろなやり方」の5つに分け、地球を一回りしたもの。「パート2」は一人の子の一日の暮らしを12か国20人にわたって取り上げたもの。小学生版と中学生版の2つがある。貸し出しは無料。

* 開発教育を考える会代表：臼井 香里
〒228 神奈川県相模原市相武台団地
2-8-23 Tel (0462) 55-1867

* スライド貸出先：

日本ユニセフ協会：東京都新宿区大京町
31-10 Tel (03) 3353-3221

* 備考：

- ① 実際はこれらの題材をその他の教材と織りまぜながら毎週の授業を進めていった。
- ② これらの題材の内の1つを取り上げて、1か月～1学期をかけて取り組むことも可能。
- ③ 国の紹介の時には位置を地図で示して見せ、できるだけ身近にあるものに結び付けるようにする。又、「あいさつ言葉カード」の

ような物を作って渡し、基本的なあいさつを紹介する。

- ④ 地図は日本画中心という固定観念を打ち破るためにも、日本が右端のもの、アメリカ大陸が中心のもの、南が上のもの等を使っていく。

* 参考資料・関係等：

- ・ "Laughing Together", "Folk Tales from Asia", ユネスコアジア文化センター刊
- ・ アジア各国の教科書や本の貸し出し—ユネスコアジア文化センター
(新宿区袋町6 Tel 03-3269-4435)
- ・ 外国(欧・米・アジア等)の教科書の閲覧—教科書研究センター付属教科書図書館
(Tel 03-5606-4314)

- ・ 『たみちゃんと言の人びと』——21世紀をともに生きる地球の仲間編 明石書店
- ・ 『アジア20か国日常会話ハンドブック』
ユネスコアジア文化センター編 蝸牛社
- ・ "The Diary of Anne Frank" Oxford University Press (Delta Readers 1200 Words Level)
- ・ "A Gift for God" Moher Teresa, 女子バウロ会

- (日本語版 『マザー・テレサのことば—神さまへのおくりもの』 女子パウロ会刊)
- ・ "Charlie Brown's Fourth Super Book of Questions and Answers"
- about all kinds of people and how they live! - Random House刊
- ・ "Thomas Cook European Time Table" Thomas Cook 刊
- ・ 『地球の仲間たち』スライドキット
開発教育を考える会編
無料貸出し—ユニセフ協会
(新宿大京町31-10 Tel 03-3355-3221)
- ・ 「ンコシケレリアフリカ」——映画 "Cry for Freedom" (遠い夜明け) サントラ版に収録。歌詞カードはANC (アフリカ民族会議) で入手できる。

4. 国語から見た開発教育

国語で、開発教育的観点から教材を取り上げ授業を行うのはそれほど異和感のあることではないと思う。従来から高校の国語の教科書の中にも、今日的な話題を取り上げ論じている文章は多く見られたし、現代文明の在り方に批判的で私達の生き方を問う題材はどの教科書にも一編や二編は載っている。そのような文章の内容に共感しながら教える教師も少なくないので、関連した問題を示唆する参考図書の適切な紹介やもう少し深く内容を掘り下げたよい手引きがあれば、開発教育的アプローチを行える下地は充分にあるのではないかと思う。また、大学受験との関わりで教科をどのように教えていくかということは高校の非常に現実的な問題だが、最近の大学受験では小論文を課すところも増えてきて、書かせる内容として地球の環境や異文化理解・国際交流など時事的な問題が取り上げられることも非常に多い。私の勤務校のように推薦入学をねらう生徒が多いところでは小論文対策として、常日頃からこのような問題についていかに生徒に考えさせ、通り一遍ではない深い理解を導き出すかということも国語の授業の行う領域に入ってきている。世界の様々な現実を知り、考えを深めることは受

験や小論文に対応する力をつけてほしいという生徒の現実的な要求も満たしていると思う。また、論議の多い新学習指導要領であるが国語感を持った国語教育ということもあっているので、開発教育的観点を取り入れた授業は当然その方向にもかなったものであると言えるであろう。

以上のように、国語は比較的に開発教育を試みやすい教科だと思う。文章を中立ちとして進められていく要素の強い教科なので、取たい問題にふれている良い文章さえあればあとは工夫次第でどのようなものでもできるのではないだろうか。ただし、高校生に教える文章ともなれば、やはりその作品自体が内容・構成ともに充実したすぐれたものでないと生徒の心に響いていかない。例えば第三世界の作家の作品を授業で取り上げてみたいと思っても、翻訳の質や量の点で満足できないことは意外と多い。翻訳の分野でもっと多く第三世界の作品に目を向け、この分野が充実することが待たれる。また、ただ文章を読んで知識として知って終わりにするのではなく、どのように共感を深め、心に残るものとさせていくかその方法を探るのも大きな課題である。それは、社会科学でそのような文章を読む時と

国語で読む時とでは何が違い、また他の教科とどう補いあうのかという問題とも通じていると思う。

国語はその文章を書いた人の心を理解するという点から入っていくので、世界の様々な状況の中で暮らす人の心情を切り出してみせるよい文章があり、それにまず感動し共感する体験ができれば、そこから人々がなぜそのような心情を持つのかという文化的・社会的・歴史的背景や問題にも至る道が開けてくる。つまり、作品を読んで感動したという紛れもない自分自身の体験から出発できることが国語という教科の強みであり、それぞれに暮らす人を心情的に理解するという側面を国語はなえるのだと思う。それを行いやすいのは、やはり現代の日本語を使って人々を描いた現代文の授業で、であろう。しかし、現実の高校の国語の授業では現代文の授業と同じ位の割合で古文・漢文の授業がある。現代文・古文・漢文を問わず共通して言えることだと思

うが、もし開発教育が現代の低開発問題に関わることだけを教えることをさすなら、国語という教科で行えることはそう多くないだろう。でも、そのような問題を自分の心で受けとめて真に理解できるために様々な事象や問

題に目や心を開き、共感する態度を養うということまで広く含むのであれば、古文や漢文の授業においてもいろいろな試みができるのではないだろうか。

高校二年生の古文の授業で、万葉集や万葉がなを出発点として、ことばの世界を通して開発教育的ところろみができるものか試みた。万葉集の時代の日本の歴史や朝鮮半島の関わりが和歌にもどのような影響を与えているか、ことばそのものが変化してくる歴史の中で書きことばを持っていなかったやまとことばに万葉がなが表れたのはなぜか、そして日本に万葉がなができたのと同じような時代に朝鮮半島にも郷札（ヒャンチャル）という表記方法が生まれていることなどを柱として、ことばそのものを追っていくだけでも、様々な世界が見えてくることを生徒に体験させることをねらいとした。次のようなながれで数時間の授業を行った。

万葉集に収められている代表的歌人の和歌を丁寧に読み味わった。特に日本の歴史の大きな流れとからむ天智天皇・天武天皇・額田王・大津皇子・持統天皇などの歌は生徒もとても興味を示すので、宮廷と政治の中心に生きた人々の和歌を読みながら、日本と朝鮮半島の

関係や渡来人の果たした役割などについても考えた。

防人の歌や東歌など庶民の和歌も丁寧に読み味わった。先にやった朝鮮半島との関わりで白村江の戦い後の日本の国の変化が庶民にはどのような影響を及ぼしていったのかを考えた。宮廷人であろうと庶民であろうと歴史の流れのなかに生きた人々の叫びや思いが和歌という形に凝縮されているということが感じとれるようににした。

これらの和歌がどのような文字で記されていたかを考えた。万葉がなで書かれた歌をそのまま示しても、いくつかのヒントを与えれば生徒は結構読めるようになるので、クイズを解くように楽しみながら、万葉がなとひらがな・カタカナとの関係を音や形から自然に学べたようだった。

方言がそのまま万葉がなで記されている東歌などを読みながら、この時代の書きことばについて考えた。表記方法を持たなかったやまとことばに万葉がなが生まれたのはなぜか、書きことばを生むのに利用した文字がなぜ漢字だったのかなどかんがええるようにした。防人の歌や東歌を読んできた経験から類推して、この時代に漢詩漢文で表現する方法を身に付

けていた日本人もいたが、自分達の本当の思いを自由に表現するためには母国語を使いたいという思いが出てくるのは人間にとって自然な欲求であり日本人も万葉の時代にそのような過程を経ていることが感じとれるようにした。

日本人が漢字を使ってやまとことばを記す万葉がなを生み出していった時代に、朝鮮半島でも同じく漢字を使って朝鮮半島のことばを記す郷札（ヒャンチャル）が生まれていることを知りながら、書きことばが生まれる、母国語を使いたいという欲求には普遍的なものがあることを考えていった。また、ことばそのものの変化していく形を知ってことばについても認識が深まることをねらいとした。

郷札（ヒャンチャル）を使って記された郷歌（ヒャンガ）の訳を読み味わった。丁度防人の歌や東歌に通ずる内容を持った歌もある中で、海を隔ててはいても人の心には共通するものがあることを感じとれるようにした。

万葉がなや郷札にみられたように、母国語で表現したいという思いやその動きが時代や地域をこえて普遍的にあることを考えているようにした。現代の、アフリカにある各民族語をアルファベットを使って表記化する試み、

ヨーロッパにもみられる民族独立と自分たちの言葉を公用語化しようという試み、日本のアイヌ語の弁論大会やアイヌ語塾の試みを通して、人間にとってことばの持つ意味を考えていった。

万葉集の和歌の美しさやすばらしさを徹底的に読み味わい、共感したあとであるならば自分たちの万葉集によせる思いを土台として、他の民族の人々もそれぞれ自分たちのことばやその遺産を大切に思うのはあたりまえなのだということを生徒はわりと容易に理解してくれたように感じた。授業を終えて生徒に書いてもらった感想の中には次のようなものがあった。

日本でも朝鮮でも思うことは同じなのには驚いた。どんなに国や言葉が違っても、やはり人の心や考える事はみな同じなのだとかわかった。自分たちのことばを用いて思いを表現することはとても大切なことだと思う。文化はまず言葉から始まるものだと思う。(男子)

自分たちの言葉を持つということは、自分たちの生きかたを子孫に受け継いでもらうということも意味している。だから、他の国の言葉や文字だけを使うような状況が続くと、ふと気づいた時には、自分達からいつのまにか

自分たちの色が消されているのだ。このことの怖さ・せつなさは日本や支配されたことのない国の人達にはピンとこないのではないか。植民地支配を受けた国の人々はこれまで他の国に染まったら、自分たちの伝統までもが吸い取られていってしまうことをわかってい、なぜなら吸い取られていった例が山ほど多いから。以前、ある写真展を見にいった。どこかの国で文字を知らない人々が布に刺繍して絵本を作り、そこに文字は自分たちの文字を刺繍しているところを写した写真展だった。あの布から伝わってくるものや刺繍をしている子供たちの目に強い誇りを感じた。国のことばとはその国の人々がそととき生きていたことの証しなのではないだろうか。(女子)

言葉や文化には、それを使っている人達の自分たちの思いを自分たちの言葉で表したいという、せつせつとしたひとつの大きな思いを感じることができる。もともとは他国の言葉や文字を使っていたとしても、自国が自立するに伴って、自分たちの文字を持ちたいと思うのは自然なことだし、それは他の誰もじゃまをしてはいけないことだと思う。むしろ、そういう国をバックアップして自立を助ける

ことが必要だと思う。互いに戦争などがあるても、どの国にも民族・宗教・文化・言葉・そして文字などがあり、それぞれの国によって違う大切なものは、絶やしてはいけない・伝承しなければならぬということをお忘れはならないのだと思う。(女子)

自分たちの民族に文字が出来るということは、自分たちを表現できるようになるということだ。そうすることで自信がついて今までできなかったこともできるようになるのかもしれない。文字の発展は、民族のよりよい発展につながっていくのだと思う。(男子)

古代中国の言葉が日本に入ってきて、千数百年も使われ、現代の我々もそれを使って生活している。その歴史の長さや中国大陸の大きさを考えると、自分たちのふだん使っている言葉が東アジアの古い文化の一部なのだと感じる。同じ漢字圏の文化の中で今では中国・韓国・日本がそれぞれ独自性を保って使いやすいように言葉を使っている。長い歴史の中で、民族や社会の違いで、同じものの中からもいろいろ違ったものが生まれたということは大事にしなければならぬ。自分たちの文化だけが偉いと思って他国に押しつけることなどはしてはならない。(男子)

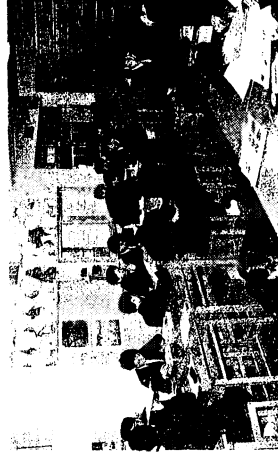
いわゆる低開発の問題を真正面から題材としてとりあげた授業ではなかった。しかし、そのような問題を理解するとき、第三世界の開発以外の問題ともいろいろにからむということを理解していることは必要だろうし、その中にことばの問題もはいるのではないだろう。かという観点で授業を考えてみた。生徒の感想を見て私としては、生徒はことばの問題からも割りとポイントをつかんでくれるものだった。授業を終えて思ったことは、生徒の自分たちに身近なことを徹底的に考えさせ、そこから出発していけば、他者のことも理解しやすくなるのだということだった。その身近な材料として万葉集を使ったということだと思う。国語はまさにふだん身近に接している日本語をつかう教科なのだから、やりようによっていろいろなものを導きだせるのだと思う。また、このような授業を作りながら、私自身にも、万葉集からことばのいろいろな面を考えることができて楽しかった。

環境授業が 如何に

「社会問題の中で関心があること」時を待たずに、即ち「立上り」を基本として、授業の中で本質的な問題をテーマに選んでいく。授業の中で関心があること、時を待たずに、即ち「立上り」を基本として、授業の中で本質的な問題をテーマに選んでいく。

ごみて太ったお地蔵さま

八王子市立由木中学校



環境問題をテーマにしたさまざまなストーリーの絵本が出来る

「環境問題」をテーマにしたさまざまなストーリーの絵本が出来る。環境問題をテーマにしたさまざまなストーリーの絵本が出来る。

「環境問題」をテーマにしたさまざまなストーリーの絵本が出来る。環境問題をテーマにしたさまざまなストーリーの絵本が出来る。

「環境問題」をテーマにしたさまざまなストーリーの絵本が出来る。

ことである。描き進んでいる途中で話の方向が変化したり、考え込んだりしている光景がよく見られた。限られたページ数でまとめ、一枚一枚描き込んでいく作業が、テーマの本質を理解させ、さまざまな問題を自分の中で発展させ、考えを深めることになる。今までも何気なく見過ごしてきたこと、頭では分かっていたにもかかわらず実行できなかったことがそれぞれに見えてきたようである。また、他の生徒の作品を互いに見ることで新たな問題意識が芽生えてもきた。作品の完成後にあったアンケートでは、制作前と後でテーマに対する考え方、自分の生活に変化があったかとの質問に50%以上が「あった」と答えている。変化せずとも、日頃の自分や家族の取り組みの確認であったり、テーマの重さにショックを受け、もっと知りたいと積極的になっている傾向も見られた。

ここ数年、世界の情勢の変化が著しく、テレビ等でも環境問題、人権問題を取り上げた番組が多く放映されたということもあったが、指導側の意図した方向にスムーズに入っていたのは、年齢的に生徒たちの興味が社会的な問題に向いていいたためと思われる。

また、歴史的にも絵画がその時代を主張し

- にラフスケッチさせる。 / 2～3時間
- 絵本用紙を仮止めして下絵を描く。 / 3～4時間
- 着色 / 6～8時間
- 表紙のデザイン(表紙/題、絵、作者名、裏表紙/出版社、マーク) / 3～4時間
- 製本、台評会 / 2時間

*使用教材

絵本セット(絵本用紙4枚、とじ糸2本、針、表紙用紙2枚、ビニールカバー)

着色材料/ポスターカラー、色鉛筆、色紙など、ペタペタしないもの

(表紙はポスターカラーのみ)

*参考資料/UTAN(環境問題を扱った月刊誌)、新聞記事、世界地図etc. ...

*題材設定の狙いと成果

日頃私たちの身の回りで起きていること、気づけることをテーマにした。文字を使えるのは表紙だけ、物語の「起承転結」のうち「起」は現実で起きている問題、「承」と「転」はフィクションで良い、「結」は自分の意見を表明することであることを条件に取り組ませた。絵本に文字を入れず、内容を説明するのが表紙の題だけというのは、結構大変な

ている事実をとってみても、一人一人に自己主張させることができるのは、美術という教科の特権だとも言える。その意味で、中学生の多感な時期に地球という共通のベースに生きているという視点から、余裕をもって今の時代をじっくりと考えること、ひいては自分自身の生き方をも考えさせることが必要とされていると思う。

約半年かけての作業である。美術科としては「絵本」はいろいろな面から評価できる題材である。しかし生徒たちにとってはこの長丁場は相当なものらしい。しっかりと自分の絵本の世界に入り込み、描き終って、表紙に自分の名前と出版社名（自分で作る）を書き入れる時、『絵本作家になった気分』を味わっているといった感想が目をつけた。

*生徒の感想

- ・何か自分にもできるんだなと思った。
- ・本当に絵本のようにしてってくれたら、きれいな地球になるかもしれない。それできないのなら、せめてこれ以上地球をこわさないでほしい。

- ・難民を描くにあたって、難民などの写真が載っている絵本を見たりして、自分がおもっていた以上に重大な問題なのだと分かった。

た。

- ・テーマに対して浅く考え気にしないという感じだったんですが、深く考えていかないといけないと感じるようになった。
- ・がんばった。自分でもほめてしまうほどがんばった。

- ・道や川に空き缶を捨てなくなった。
- ・制作している時は、とても楽しくて一生懸命やっていたのに、今見てみると「ここをこうすれば良かった」と思うところがいくつかあります。でも、絵の苦手な私にとっては、満足のいく作品にでき上がったのでとてもうれしいです。

- ・今は人間が壊した環境を、これからの人間が住みやすくなるように改善しようとしているが、それまで人間が自分たちだけの利益を考えてきたから自然は破壊され、動物の絶滅も出てきた。これからは動物たちにも住みやすい世界にしたい。
- ・道端に落ちていたゴミを見て、不信感を抱くようになった。

- ・年々増え続けるゴミだか、私たちはゴミ問題だけでなく、住み良い自然環境を守ることとを重視しなくてはならない。そう思うだけじゃなく実行するべきだと思った。

- ・今までガムの紙などをポイ捨てしていたが、自分の心を見つめ直すことが少しはできた。
- ・人間が一番地球を汚している。後で絶対にしかえしがくると思う。地球を守っていいのは人間が一番だと思う。このきれいな星を大切にしたいと思った。

- ・絵本を描いていて、主人公の子と自分と重ねているような気がしてきました。私は川にゴミを捨てたりはしないけど、合成洗剤は使っているし、けっきょく川を汚しているなあと思った。

- ・けっこう大変だったけど、自分で一冊の絵本を描き上げられて思い出しに残ります。改めて人種差別について見直したくなった。
- ・自分で書いておいて、胸を張って、こういう事がいいんだよと言えるようになったほうがいいと思った。

- ・少々難しかったけれど、楽しくできた。これからの世界がどう変わっていくか気になった。

6. 世界の音楽を学校教育に導入するについて

「ワールド・ミュージック」が一部で注目されつつある。今までは「民族音楽」とか「エスニック・ミュージック」などと呼ばれ、世界の国々の伝統的な音楽の中からエキゾチックな興味をひくものが紹介されてきた。しかしここ2～3年は、世界各国のポピュラー音楽が刺激的に聴かれていくようだ。教科書にも「世界の民謡」とか「民族音楽」が紹介され、カリキュラムの中に組み入れられている。今後世界の様々な音楽文化は、なぜ、どのようにして聴かれていくべきだろうか。

西洋のクラシック音楽こそが人間の精神性を深く表現していて、他の音楽は劣している。というような考え方は、まだ一部に根深く浸透しているようだ。そこで、音楽をその社会の中で求められている役割り（どんな状況で演奏されるか）、その担い手（演奏者や聴衆）場（どこで演奏されるのか、寺院か、宮廷か、劇場か、マスメディアを通じてか）などに応じて、民俗音楽・宗教音楽・芸術音楽・大衆音楽（ポピュラー音楽）と一応分類してみよう。西洋の芸術音楽と他の国の民俗音楽を比較して、その芸術性の優劣を論じても意味はない。西洋と例えばインドの各々芸術音楽を比較してみると、音階・リズム等でははるか

にインドの方が複雑で高度である。和声や音楽形式では西洋の方が論理的で高度といえる。しかし、それは要するに各々の文化の求める方向性の違いでしかなく、その芸術性としては各々非常に高度に発達しており、双方共深く知れば知る程尊敬の念を禁じえない。

そもそも「芸術音楽」というものを必要としない社会も多く存在している。例えばアフリカでは、音楽は「身体と精神」「個と集団」「日常と非日常」「人間と神」などの境界を超越し融和するためにあるようだ。

作品がそれ自体で自己完結的に結晶・昇華してしまふ芸術音楽と、それを通して「場を一体化」してしまふ音楽とは本質的にその性質が異なる。

更に言えば、農民の心のこもった素朴な民謡の一声、名人の気迫のこもった三味線の一バチだけで、高い芸術的価値をもつ作品を心をこめずに演奏する（西洋音楽では作者と演奏者が別である）音楽の価値なんかフットンでしまふ。魂のこもっていないものに価値はない。それは民族性というより、一個人の人間としての資質ではある。しかし、ある文化のもつ微妙なニュアンスや深遠な表現の高みは、それを支える人々の永い時代を通じて培った

感知の結晶である。他にはかけがえのないものである。その意味で音楽に「開発途上国」は存在しない。ただしそれは、常に衰退してしまふ可能性をもっている。

例えば日本の状況は悲観的である。共同体ごとに伝承されてきた文化は今日では死滅しつつある。多彩であるべき地方ごとの固有性は失われつつある。伝統芸能は若い世代には全くといってよいほど見むきもされず形骸化している。そのかわりに導入した西洋音楽は元々日本人の音感覚とへだたりが大きく、まだ日本独自の文化として根付いていない。日常の生活の中に音楽が表面的にあふれていても、その内実は貧弱なものだ。

近代化の代償として、私達は多くのものを失った。私達は世界の音楽文化を知り、そこから多くのものを学ばせていただき、私たちの失ったものを一つずつ築き上げていく努力が必要なのだろう。

さて、音楽教育において（という事はまず教育者に）、世界の音楽文化を導入する上に必要と思われる事は、

- 他の文化を尊敬できるようになること
- 相手の音楽を相手の文化の文脈で考え、受け入れて、そこで起きる異和感を大切にする。

自分の物差しで理解しようとせず、丸ごと受け入れられるようにする。多様なものの感じ方を自分の感性に持つ。その上でその文化の深さを学んでいく。

●実際に自分でやってみる。

頭で理解する事（理念・観念）はもろい。目で見、手で触れ、体で演じてはじめて本質を体得することができるようだ。それは自己変革を強いるから。

●魂のこもったもの・真心のこもったものを感じとる。

様々な民族性や表現様式は違っても、それが表面だけ整ったものか、その中に真実のこもったものか、見分けがつかなければ、音楽はただの感覚的な感性のヒマツブシにしかすぎない。ために生徒に、同じ曲を何種類の演奏で聴き比べをして「誰が一番スゴイか」と聞いてみると良い。（できればジャズなどが違いがはっきりする。）子供達はおそろしく感度が高くてびっくりするだろう。

普通部では各学年ごとにテーマを決めて鑑賞し、又実際に見、演奏している。

- 一年生 日本音楽の歴史
- 二年生 西洋音楽の歴史
- 三年生 世界の音楽

〔実例〕

韓国—仮面劇、パンソリ、男寺党

中国—京劇、楽器紹介

モンゴル—ホーミー

インドネシア—ジャワとバリとス

ングのガムラン、バリのケチャ

インド—シタール演奏、タブラの

実例

中近東—イランの器楽合奏

ブルガリア—女声合唱

スペイン—フラメンコ

ポルトガル—ファド

アフリカ—ガーナの木琴、ロック・

バンド、ピグミー

中南米—ジャマイカのレゲエ、ブ

ラジルのサンバ

合衆国—黒人教会、ブルース、ジ

ャズ

今後、ビデオを使用し、短時間（5分～

10分）でよいから、「スゴイ！」と思える

ものだけを選んでいる。（教材の収集には大

変な努力が必要である。）自分で実際に演奏

できるものは下手でも実物を見せて、やって

みる。又世界の珍しい楽器を見せて（演奏し

て）みる。（その発想のユニークさには舌を

まく。）

日本国内の楽器や音楽と思われているものに、実は遠くペルシア～東アジア、東南アジアと共有しているものがある、日本はアジア文化圏の一部なんだという事がさりげなく納得できるようにする。インドネシアのアンクルンという竹の楽器を生徒全員で合奏してみ。日本の箏、三味線、尺八の三曲合奏、ブルガリアの地声の女声合唱団、インドネシアのバリ島のケチャ、ガムラン音楽等の方々をお迎えしてコンサートを開く。

……以上、世界の音楽を教育に導入する上での提言を、というような依頼で、自分勝手な事を書き散らしてしまいましたが、一番大切な事はまず自分が感動し変わることかも知れません。そこで実際に「こどもの城」でインドネシアのジャワ島のガムラン音楽を自分達で演奏して「自己開発教育」とでもいうべきワークショップを開くことにしました。「こどもの城」の関係者、講師の国村史さん、ガムランのメンバーの方々、そして企画から報告原稿まで協力して下さった森重敏行さん心から感謝します。

7. 事例「ガムランの夕べ」によせて

民俗音楽を学校音楽教育へ導入するために

はじめに

東京・青山。「こどもの城」の近代的な高層ビルの4階、音楽スタジオ前のロビーには何十個もの色とりどりの太鼓が並べられていた。ふだんならこども達の喚声と、にぎやかなアフリカのリズムがあふれるこの不思議なスペースも、一般来館者の時間帯が終了してしまえば、人影もない。今回のガムラン体験講座は、まずこのロビーの一角に置かれたビデオモニターのまわりを、来講者たちが取り囲むところから始まった。

会場となった「こどもの城」は厚生省によって建設された、初の国立総合児童センターで、音楽をはじめ、造形、体育、保育などの諸部門のほか、青山劇場・青山円形劇場、宿泊・研修施設に至る大がかりなものである。音楽部門においては、洋楽はもとより、学校ではとり上げられにくい邦楽、民族音楽も積極的に導入し、開館以来約4年、すでに数多くのこども達が、あるいは三味線に親しみ、またコーラスやブラスバンドなどでも活躍している。ガムランもその一つで、オープン当初よりジャワから演奏家を招いての記念公演や、週一回続けられている「こどものための

ガムラン講座」、強い要望により開設された「おとなのためのガムラン講座」などのほか、随時一般来館者向けのコンサートなども企画されて来た。いくつかの音楽大学を除けば、まだ国内に数少ないガムランのフルセットが、ここではこどもたちのために大活躍しているわけだが、今回のNew DESAによる講習会も、こどもの城の協力によって実現した。ある意味では世の中に先駆けて、こども達こそ音楽を通じて国際理解を実践しているとも言えるわけで、その場を利用しての今回の企画の意義は大きいものがあると言ってもいいかも知れない。

講習会は、ミャンマー、タイからインドネシアに至る、東南アジア各地の伝統音楽の概説に始まり、ガムランの魂とでも言うべき巨大なゴングの製造過程もビデオによって紹介された。ガムランの楽器に対し、ジャワの人々がなぜ単なる物として以上に捧げ物を備えるなどして敬意を払うのかなど、その製造過程の想像を越えた過酷さ、神秘性から、自ずと理解されたであらう。

実際に楽器を使っている講習は、模範演奏を混えながらならやかに進められ、受講者にとって、生れて初めての楽器を前にして緊張し

ながらも、次第に音楽が形を成していく楽しさが体験できたのではないだろうか。

1. ガムランについて

ガムランとは、インドネシアのうち、ジャワとバリで行われている金属製打楽器による合奏を指すことばである。地域により様々な形態があるが、こどもの城はじめ、各音楽大学で導入しているものの多くは、中部ジャワの王宮で育まれたスタイルに則ったもので、その規模、音楽性ともに他の追隨を許さないものと言える。フル編成では20名ほどの演奏者が必要とするが、そのほとんどが青銅製のゴングや鍵盤楽器（木琴のように音板が並べられている）で、そのほかに弦楽器や笛、太鼓なども含む。大小さまざまなゴングは、すべて音階順に調律され、あるものは5〜6個並べて吊り下げられ、また、ひもを渡した枠の上に上向きに置かれているものも多い。あらゆる音楽の中で、これほどのゴング類を操るものは例がなく、まさに青銅のオーケストラの名に恥じない。

ジャワの王宮ではこれらの楽器が、代々伝えられ、専門の楽師も多数抱えてきた。イン

ドネシアが共和国になった現在もお、王宮の文化的権威のみは存続し、伝統的儀式が続けられている。ジャワの生家にとって、ガムラン伴奏による舞踊そのものが、王権の神聖さを誇示する秘儀にほかならない。そしてまた、一般庶民レベルでも、結婚式、成人式などの晴れがましい行事に伝統音楽は欠かせない。その意味では、いまだに芸能が生活と結びついており、単なる舞台芸術ではない。これらの音楽を聴くことすなわち、儀式や祝宴に参加することであって、入場券を買って劇場へ行くという、近代西欧型のコンサートは存在していないのである。

さて、ガムランの楽器のほとんどは、「たたく」楽器であるので、基本的な演奏法はそれほど困難なものではない。初めてではなかなか音の出ない尺八やヴァイオリンのような難しさはないと言ってよい。むしろ驚くべきことは、一つ一つの楽器をたたくリズムが見事な音のピラミッドを成すように構成されていることで、全員で同じことをするわけではないことにある。楽器によって、2拍ごと、4拍ごと、8拍ごと……etc という風に役割が定められ、中には、最も大きいゴングのように32拍、64拍、時には128拍に一回という、

長大な間隔でしか登場せず、そのかわり曲の大きな区切り目を知らせる大事な機能を持つものもある。

一方では鍵盤楽器のたたき出す骨組み的なメロディに、弦、笛、歌などが肉付けとなるメロディをからめるように演奏し、多層構造的な音楽となる。何よりも、ガムランは繰り返しを中心とした音楽であり、単純な音型を延々と反復することが、音楽を作り上げていく上で最も根源的な要素となっている。以上のことから、ガムランの本質的な特徴は、節まわしの面白さでも、ドラマティックなストーリーでもなく、繰り返されるパターンの連続による、催眠術的快感と言えるかも知れない。このことは、古くから西欧の音楽家にも大きなショックを与え、20世紀初頭のドビュッシーから、現代のミニマルミュージック、あるいはテクノ・ポップの分野にまで強い影響が見られる。

2. ガムランが教えてくれるもの

世界のさまざまな民族音楽の中で、とりわけガムランがユニークである点は、次のよう

なことになる。

a あくまでも合奏であること。ここでは個人的な技巧よりも、全体の調和の中でいかに個々の役割を果たすかが重要である。

b ピアノや五線譜ではどうしても真似できない音階であること。ガムランの音階は大きく2種（スレンドロとペログ）があるが、そのどちらも、西洋音階とはびったりとは一致しない。厳密に言えば、楽器を作る職人によって、すべての音程が少しずつ違っているという、ある種の大らかさがある。しかしそのことが、音楽の真価をそこねることなく、むしろ、バラついたピッチから生まれる、音のゆらぎやうなりが、魅力の一つとなっている。

c 本来的には、日本の伝統的な音階に近い。一見独特のガムランの音階も、5音々階であることや、沖縄音階に近いものなど、わが国の音感と類似する要素が多い。見た目には似ても似つかぬインドネシアと日本の楽器から、かえって親近感のあるメロディが生み出されていることになる。

d 20人もの大合奏を作り上げていく原理は、極めてち密かつ合理的なもので、洋楽理論とは全く別の出発点から、かなり高度な音楽構

「ガムランの夕べ」の感想から

(ガムラン音楽は)メロディーをよく聞き、他(パート)との協調していく演奏法にインドネシアの「共生の原理」の一端をみたような気がした。聞くだけではなく、実際に演奏してみてもこのことを体験した。この演奏はお互いが補い合って曲が作られている。

(羽佐田 透一：大学院生)

フィリピンのガンスという打楽器を思いだし懐かしくなりました。わたしたちが普段耳にするシンセサイザーなどの人工的な音と違い、ひとつひとつ手作りの楽器をただ叩いているだけなのに…、何人かで、音を聞き合っていて演奏するというのはとても楽しいことだと思っています。ガムランに触れてみたのは初めてですが、インドネシアの村の風景が見えてくるような、食べ物のにおいが漂ってくるような気がしました。「開発教育」を考えたときに、政治だとか経済構造だとか、考えていくと頭が痛くなってしまいますが、こうした音楽とか民族(?)衣装とか、自分たちの生活と比較しやすい、身近な関心からはいいいくのは面白いと思います。

(肥塚章子：会社員)

大変おもしろかった。素人が大勢集まって、いきなり曲らしくなくていくには感動した。より人間の原始的な本能の部分が出ていると感じた。パーバリックなリズムがオステイトで続く。伊福部昭を思い出しました。

(中野格侍：大学生)

自閉症の子供たちが好きだという意味が本当によくわかります。理論的なことは分りませんが、実際に打楽器のもつ倍音が神経に及ぼす影響は、体験してみても分かるような気がします。それは、大きな音を聞くとビクッリするような感じを共通にするところがあるのだと思います。

(中村美香：大学生)

ヨーロッパの音楽とあまり違うので、大きくとまどってしまいました。又、打楽器の不思議さに、管絃楽中心の日本の音楽とも大きく違って、何かうまく馴染みませんでした。しかし、打楽器の音の厚さに驚いています。また、実際に楽器に触れるのは大変な喜びでした。

(香山芳久：中学教員)

ガムランの良さは前々から聞いていたのですが、これほどよいとは思いませんでした。将来は自分の学校の生徒にやらせられたらよ

いと思いました。

(定方一悦：高校教員)

非常に幻想的で根源的なすばらしい演奏でした。ピデオなどを見て、ガムランが東南アジアの人々の精神的なものと深く結びついた音楽であることを知り、納得しました。自ら触れてみて、その演奏の難しさに驚きました。素晴らしい踊りや音楽で、頭で考えるのではなく、体で得るこうした試みなど、相手の文化を理解するために大切なことだと思えます。

(羽賀正明：大学生)

最初に演奏を聞いた時に比べて、実際に自分で演奏を体験してみても、再び演奏を聞いた今は、はるかに音楽に親しみを持って聞いていることに、我ながら驚いています。ひとつひとつの楽器の音も聞き分けやすくなって、響きの美しさが、先程に比べて耳の奥まで届いてきているようです。ちょっと楽器をさわるだけで、こんなに音に対して心が開けてくるとはほんとうに驚きです。やはり、楽器や音楽は自分でやってみなくては、わからないものだと思いつつ、きょうはきつと家に帰って行くことでしょう。また、この音楽を聞きながら感じることに、ガムランは「響き」の

楽器なのだなあと思っています。打楽器の美しさを、きょうは教えてもらったように思います。いままで打楽器がこんなに美しいなんて一度も思ったことはありませんでした。きょうのお話にあった、ガムラン音楽やバリの文化が古くは雲南地方の文化とつながっていることや、楽器の果たす役割など、結局、音楽もことばや文化と同じで、国語と共通のことがたくさんあるんだなあということも知りました。きょうの田村先生のお話を聞いて、これからアジアの音楽などを聞いても、聞くときの気持ちや、受取り方がきつと以前よりずつと共感を持って聞けるだろうな—と思います。

(武田尚子：高校教員)

私の勤務する学校も「民族音楽大系」を購入し、少しばかりではありますが、見たことはあったのですが、実際、ガムラン音楽がどういうものか、また、どういう意味をもっているのかなど全くといって良いほど知らなかったのですが、かなり、意味深いものであることを教えていただき感謝しています。決してガムラン音楽は日本のそれとかけ離れたものではなく、むしろインドネシアが日本に近い存在であることを知り、音楽に関しては、

どちらかというと知識不足でしたが、少しばかり学ぶことができました。

(幸田雅夫：高校教員)

ガムランの「ガ」の字も知らなかったので、説明を受けて、その後で演奏し、そして自分たちで演奏という順序は、とてもよかったように思います。ガムランの楽譜の説明を聞いて、その演奏を聞いた時、ふと次のように思いました。「ガムランは人の上に人をつくらず」。たしかにこの音楽にも主導権を握る人がいますが、ひとりひとりが骨を埋める部分をになってこそ、演奏が成り立つというのを聞いて強い感動を受けました。

(高橋友理：大学生)

ガムランの一番の素晴らしさは、互いの人間を尊重しあって成り立っているところだと思います。これは「開発教育」で一番大切な視点であり、現在の学校教育でも十分認識していなければいけないことだと思います。学校教育では「生き方」をどう履ませるか、そういう意味でガムラン音楽は子供たちに具体物で提示できるものであるという気がします。

(木崎克昭：小学校教員)

ガムランは日本にティルタ・サリが来たとき、見る機会があり、大変感激した思い出が

あります。きょう、自分でガムランの演奏に参加でき、自分の出す音が他の人とリズムをつくっているという実感がすごく嬉しかった。ティルタ・サリを聞いた時も、西洋音楽を聞き慣れていた私(ホルンを6年間やっていたので)の耳にはすごく不思議な音楽に聞こえましたが、ガムラン音楽にもしかりした理論があること、また、ガムランが信仰、宗教と深く結び付いていることもがわかりました。ガムランは、オーケストラとはちがいが、各自が独立して音楽を組み立てていくのもですから、アジアの特徴がよく出ているように思います。今回は自分で演奏できたことがたいへん良かったです。やってみると素人でも何とかなるものです。からだ全体を使ってガムランを体験できることは代えがたいことです。これからいろいろな民族音楽に接し、西洋音楽をヨーロッパの民族音楽として相対化できればと思います。

(小林和夫：大学生)

タイへ旅行したとき、たびたびこうした楽器を目にしたことはあっても、さわるのさえ恐れ多いような気持ちでして、実際に触れることはできませんでした。きょうはガムランに囲まれて、一番短い曲だとは言え、本当

のガムランの曲を演奏するのに参加できて本当に嬉しく思いました。ガムランを通していろいろな方が集まり、同じ時を共有できるのはとても素晴らしいことだと思います。一人でも多くの障害児のことにわたちが心を開いて、素敵な時を持てるように望んでやみません。私は、来年、故郷の岐阜へ戻り教師生活を始めることになりましたが、小規模ながらも東南アジアのことで心をつながる人たちと何らかの形でこうして集まり、何かできたら…、あるいは、子供たちにもこうした感動を伝えられたらと思っています。

(K . H : 大学生)

音の持つ本質っていうのはなんだろうと思ってしまいました。宇宙との交信術？ 音の響きと押さえのテクニクのすばらしさ、ガムランを聞いていると鼓膜だけでなく、骨振動で感じる様です。音で集団の場をつくるというのとは動物のテリトリーのようなのでしょうか。

(U . T : 大学院生)

8. グローバル教育と英語

GLOBAL EDUCATION THROUGH ENGLISH

The English Classroom provides a unique place for teaching global awareness and world problems. Since all foreign languages are, by definition, "international" and English, the language of world communication, is the most international foreign language, the school English class should be the most international subject on the curriculum. Unfortunately, however, many English classrooms remain places where students' horizons are kept narrow, where world issues are ignored, where class activities are grammar drills or translation, and where students are too often turned off both language and learning.

ENGLISH AS AN INTERNATIONAL LANGUAGE

The first step in internationalizing the English classroom is to rethink our image of English. Traditionally, English has been seen either as

- (1) a linguistic system of difficult vocabulary and grammar to be memorized for tests
- (2) a medium for dialy conversation about topics such as family, sports, fashion and hobbies
- (3) the mother tongue of English-speaking countries for understanding the peoples and traditions of the USA, Britain, Australia, and Canada.

Teaching English is more than this, though. It also means teaching:

- (4) English as an international language (EIL): teaching not only about Britain and the US, but also about the countries around the world where English is spoken as a national or second language (India, HongKong, Jamaica, Kenya, the Philippines). It also means teaching English as the international language of business, diplomacy, technology and tourism, the language used between Chinese and French diplomats, by German and Arab businessmen, by Japanese tourists in Indonesia.

- (5) English for learning about the world: studying English as a means of international communication to learn about our global village and to understand social issues, world cultures and global problems. In this role, English is a "window on the world" helping students to learn more about the peoples of the world (both Arabs and Chinese, Russians and Brazilians), social issues (racism, sexism, minorities, women) and global problems (war and peace, world poverty, human rights, environmental destruction).

Part of the job of international English teachers, then, is to broaden students' views of English, to show English being spoken by people in both New York and Nairobi, by both rich and poor, by both black and white and to show how English can be a language of world citizenship for learning about and working to solve the problems of Spaceship Earth. This can be achieved by integrating ideas and activities into English teaching from such fields as global education, peace education, development education, human rights education and environmental education.

IN CLASS ACTIVITIES

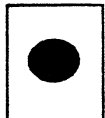
ENGLISH STRUCTURES Vocabulary and grammar exercises are the focus of many English classes, yet these can often be practiced using international themes. Beginning language learners, for example, can learn the names of colors, shapes and instructions using color cards showing flags of the world (Figure 1). You can also have students each draw a flag from a hat and give an oral or written report in English about "their" country, its people and customs. For a vocabulary area like "the calendar", students can do oral practice with dates while learning about important international days (Figure 2). Grammar points such as the conditional can be also practiced while helping students understand the dilemmas of people in developing countries (Figure 3). Traditional language teaching activities such as drills, dictations and dialogs can also be adapted for use with global education themes in English.

ENGLISH SKILLS Many global education activities can promote English speaking and listening skills. One example is a version of the conversation game "Find Someone Who..." in which students walk around the room interviewing classmates (Figure 4). This game can help students practice oral Yes/No questions while showing them the many international connections they have with the wider world. Themework on global education topics such as the environment can also stimulate practice in the four skills of reading, writing, speaking and listening. A lesson on "endangered species", for

COLOR CARDS

FLAGS OF THE WORLD

 SOUTH KOREA
 SAUDI ARABIA
 SWEDEN

 VIET NAM
 SUDAN
 JAPAN

 BRAZIL
 TURKEY
 LIBYA

I GUESS THE FLAG.

- 1 It's all green.
- 2 It's white with a red circle in the middle.
- 3 It's blue with a yellow cross.
- 4 It's red with a yellow star in the middle.

II LISTEN & FOLLOW THE DIRECTIONS

- 1 Pick up the red flag with the white moon and star. What country's flag is it? Give it to Emiko.
- 2 Pick up the green flag with the white Arabic writing on it. Put it on the world map beside the correct country.

(Figure 1)

INTERNATIONAL DATES

January	15th	Martin Luther King Day
March	8th	International Women's Day
April	22nd	Earth Day
June	5th	World Environment Day
August	6th	Hiroshima Memorial Day
October	16th	World Food Day
October	24th	United Nations Day
December	1st	International AIDS Day
December	10th	Human Rights Day

PAIR QUIZ #1 (YES/NO QUESTIONS)

Is Earth Day on April 21st?
 No, it isn't. It's on April 22nd.
 Is Human Rights Day on December 10th?
 Yes, it is.

PAIR QUIZ #2 (WHEN? WHAT DAY?)

When is Martin Luther King Day?
 It's on January 15th.
 What day is October 24th?
 United Nations Day.

(Figure 2)

(Figure 3)

THIRD WORLD PROBLEMS

WHAT WOULD YOU DO?

Jose is 12 years old. He lives with his family in a poor village in Brazil. His family doesn't have enough money for food and clothes. Jose doesn't want to leave his family. But he could make money to help his family if he went to the city to join the street children. What should he do?

WRITE YOUR IDEAS

"If I were Jose, I would _____."

SOURCE: Exploring the Third World (Franz)

CLASS SURVEY

Find someone who:	
A is wearing something that was made in another country	B is learning a foreign language
C has helped a visitor from another country	D enjoys a music group from another country
E can name a famous sports star from another country	F learned something about another country on TV recently

A	B
name	name
country	country

C	D
name	name
country	country

E	F
name	name
country	country

SOURCE: Global Teacher, Global Learner (Pike & Selb)

(Figure 4)

example, might begin with reading about disappearing animal species followed by a speaking/listening role play such as in Figure 5, then letter writing to government and environmental groups.

TOPICS Part of integrating an international dimension to English classes consists in putting textbook topics into a world perspective. When we teach about topics such as clothes, sports, food or holidays, we should take the opportunity to introduce the clothes, sports, food and holidays of cultures round the world. The Usbourne book "Peoples of the World" is helpful for this.

MUSIC Many teachers use English songs for teaching listening comprehension, vocabulary building and discussion. An international dimension can be added by choosing songs with global themes such as "We Are the World" (about world hunger) or "Hand in Hand" (about international friendship). Another idea is to study a song such as John Lennon's "Imagine", then have your students write their own version (Figure 6).

VIDEOS One way to bring the world into the English classroom is with movies. These provide an exciting way for students to study English while learning to understand the world's people and its problems. Popular commercial films (usually with English captions) include "Gandhi" (India), "Cry Freedom" (apartheid), "Missing" (human rights) and "Dances with Wolves" (intercultural understanding). Good non-commercial videos include "Blue Eyes, Brown Eyes" (discrimination), "Famine & Chronic Persistent Hunger" and

ENDANGERED SPECIES ROLE PLAY

YOUR ROLE: African Elephant



Work in small groups. Each student is one endangered species. All the endangered animals are having a meeting. They are scared because the humans have killed almost all of them. Explain to your group the answers to these questions.

Where do you live?
How many of you are left?
Why are people killing you?
What can you tell people to make them stop killing you?

SOURCE: Heal the Earth (Sargent)

(Figure 5)

IMAGINE

Imagine there's no pollution
It's easy if you try
No pop cans on the roadside
Above us no acid rain
Imagine all the people
Recycling everything

You may say I'm a dreamer
But I'm not the only one
I hope some day you'll join us
To make a cleaner world

(Figure 6)

"Space ship Earth:Our Global Environment" (ordering information from the "Global Issues in Language Education Network" below).

GUEST SPEAKERS Bringing an international guest speaker into the classroom is an excellent way to raise student's awareness while practicing English for communication in a real situation. English-speaking guest speakers can be foreign students from Africa, Asia or South America studying at local universities, representatives from groups such as Amnesty International, Greenpeace or UNICEF, or English-speakers in the local community who help foreign workers or who have lived in Third World countries.

OUT OF CLASS

PROJECTS Out-of-class projects offer another means to internationalize English study. Why not have your students interview local citizens about issues such as AIDS or world hunger? Get them to survey their garbage and energy use at home. Ask them to find out which products at the local supermarket come from developing countries. Or why not have them research an international organization such as Friends of the Earth, UNESCO or Save the Children? All of these projects can be written up as English reports or posters and given as oral presentations in class.

to think about important topics, improve their writing and practice oral expression. Teachers can stimulate global awareness by setting themes such as "international friendship", "world peace" and "our global environment".

COMMUNITY VISITS Local visits in the community can also provide rich material for classroom English practice. Excursions to garbage recycling stations, Korean schools or Islamic culture centers can make classroom English lessons on the environment, minorities or world religions more meaningful.

OVERSEAS PEN-PALS Overseas pen-pals not only give students motivating writing practice but also promote world friendship and global awareness. Pen-pals can be arranged through international agencies, sister cities or personal contacts. English pen-pals shouldn't be limited to Americans, Canadians or Australians. North-South or Asian pen-pal programs with children in India, the Philippines, Venezuela or Korea can also lead to very powerful global learning. Another alternative is for your class to adopt a Third World foster child from groups such as Foster Plan Japan to correspond with in English.

RESOURCES

TEACHING MATERIALS Although more international topics are appearing in English textbooks, most still feature very few global education lessons.

SPEECH CONTESTS English speech contests give students the opportunity

Japanese publishers which issue texts or side readers on global issues include Sanyusha (Cosmos, Atlas) and Kyoiku Shuppan (One World). Global education books from English-speaking countries such as the US and Britain are a good source of English class activities on international theme

Recommended books:

Cooke, D. (1985) *Theching Development Issues*. Manchester Development Education Project, UK.

Elder, P. & Carr, M. (1987) *Worldways:Bringing the World Into the Classroom*. California: Addison-Wesley.

Fisher, S. & Hicks, D. (1985) *World Studies 8-13*. Edinburgh: Oliver & Boyd.

Franz, D. (1987) *Exploring the Third World*. New York: American Forum.

Fyson, N. (1984) *The Development Puzzle*. London: Hodder & Stoughton.

Pike, G. & Selby, D. (1988) *Global Teacher*, Global Learner. London: Hodder & Stoughton.

Sargent, D. (1991) *Heal the Earth*. Dawn Press. PO Box #3, Ouda-cho, Uda-gun, Nara 633-21

Trundle, R. (1990) *Usbourne Book of Peoples of the World*. London: Usbourne.

GLOBAL EDUCATION CATALOGS The following American and British catalogs contain a rich selection of books, videos, teaching packs, posters, maps and computer software on global education topics. Free catalog copies are available from the "Global Issues in Language Education Network"(see below).

Social Studies School Service (SSSS), 10200 Jefferson Blvd. Box 802, Culver City, CA 90232-0802 USA

Center for Teaching International Relations (CTIR), University of Denver, 2201 S. Gaylord, Denver, CO 80208 USA

Centre for World Development Education (CWDE), 1 Catton St. London WC1R 4AB UK

NEWSLETTERS DEALING WITH GLOBAL EDUCATION AND ENGLISH TEACHING

(1) The "Global Issues in Language Education" Network

English teachers interested in learning more about how global education can be integrated into the foreign language classroom are invited to join the "Global Issues in Language Education Network" and subscribe to its quarterly newsletter (¥1000 per year). Further information from Kip Cates, Tottori University, Tottori 680 Tel: 0857-28-0321 Fax: 0857-28-6343

(2) The New English Classroom

The monthly magazine from Sanyusha contains excellent ideas for teaching global awareness and world problems in English. 新英語教育 三友社出版
112 東京都文京区音羽 1-19-23成美堂ビル Tel: 03-3946-0285 Fax:03-3946-0377

9. ニューヨークから日本の国際化への提言

日本と国際化

「これが日本の国際化なんだったら、日本は国際化なんかなくてもいい。」と語気を強めて言ったのは、アメリカ在住5年のある日本人女性だった。大学で日本語を教える彼女は、面倒みがいいので、日本に関連することがあるとアメリカ人日本人両方から頼りにされ、いろいろな相談を受けることが多い。最近の日本人留学生の増加は、質の高い教育と比較的治安のよい彼女のいる地域でもみられる。留学生の年齢も低下し今や小学生もまれではないという。子供を国際人にするため、また、英語の習得をさせるためにという理由で小さい時から留学させる日本の風潮に彼女は疑問をなげかける。というのも、いくらまだ治安が良いとはいえ、その地域にも、十代の妊娠、アルコール中毒、麻薬、エイズなどさまざまな社会問題が存在し、子供をもつアメリカ人、特に思春期の子供をもつ親が、子供達の意志を尊重しながらも、そのような問題から子供を守ろうとどんなに神経をとがらせているかを知っているからである。いくら、アメリカ人のホストファミリーがそばにいて、言葉や文化の違いもあるもので日本の子供達はかなり無防備な状態で生活していることに結果的になりやすく、問題も生じてくる。すると、ホストファミリーや留学生の受け入れ校が対処に困って、地域に長く住んでいる

日本人に助けを求めてくると言うわけだ。困っている人がいると放っておけない彼女なので、日本にいる保護者の代わりに、走りまわることと少なくともない。

留学が悪いといっているのではなくて、なぜ国際化や英語の習得ということとで日本の社会の中でさえまだ自立できていない無防備な子供を海外へ送り出すのか。一体日本にとつての国際化とは何なのかについて、考え直すべきだというのが彼女の気持ちではないかと思う。

国際化という言葉は、どこでも耳にするが、それが使われるようになった経緯をロジャーグッドマンは「JAPAN'S INTERNATIONAL YOUTH」の中で、1970年代末には、近代化と西洋に追い付き追い越せというスローガンが不要になったので、それに次ぐスローガンとして、国際化という言葉が登場してきたと述べている。今や、企業の海外進出、日本市場の開放、貿易摩擦の解消、国際市場での競争力増加など国際的視野をもって考え、世界規模でビジネスを展開することは当然のこととなっている。ここで注目したいのは、国際化とは結局、国際社会における日本の経済力の増強をめざす国家主義的なスローガンでしかないといえる点である。しかし、国際化がめざすのは、地球上に住む一人一人が平和であり公正な社会の中で生活できるようにすることであり、そのために人種、民族、文化、宗教などの違いをこえた相互理解と協力の姿勢や

態度をそなえることではないだろうか。

それでは、国際化が教育面でどう反映されているかを見ると、海外日本人学校の拡充、帰国子女受け入れ態勢の整備といった企業の海外進出の増加に対応した動きと、外国語の学習、留学など異文化との触れあいに焦点をあてた動きが中心となっている。だが、これだけでは、自国の経済発展からもう一步進んだ国際化を達成するには、不十分である。その目標の達成のためには海外へでていくだけでなく、国内でやれること、またやらなければならないことがたくさんあるはずである。

まずは、世界と日本、日本と地域、地域と自分の関係つながり方をさまざまな角度から知ること、特に世界中が相互に依存していることが実感できるようになることが大切であろう。さらに、地球環境問題、南北問題など国家間では勿論のこと、各個人の協力がその問題の解決に不可欠であるという理解と認識を深めることが必要である。

そして、人種、民族、文化、宗教、信条などの違いをこえた相互理解と協力の姿勢をそなえるに当たっては、各個人が認められ、尊重されるような環境作りを身近な所、学校や地域から始めなければならない。そうでなければ、各個人を尊重する態度の養成を授業で教えてもきれいごとをいってやるだけになるからだが、想像以上に複雑で困難な作業でもある。例えばアメリカでは、人種や民族などのさまざまな違いを肯定的にとらえ、違うこと

こそすばらしいのだと盛んに唱えられている。しかし、日常生活での何げない出来事の中にその現実のきびしさを感じられる。ある小学校では、それまで毎年恒例だったクリスマス祭を祝う行事の扱い方が問題になった。つまり、学校でキリスト教のお祭りだけを取り上げるのはおかしいと、キリスト教の信者以外の家庭から苦情がでたためだ。また、ある大学の寮ではロビーにクリスマスツリーを飾るのはある特定の文化だけを代表することになり、不適切ではないかという意見がだされ、これに対して、良き昔の伝統が失われるとすると反対の声があがり、結局ツリーは飾られることになったが、ツリーにつける飾りは、キリスト教を象徴するものをさけることになった。違いを認めるにしても全く同じだけ、同じやり方ですべての民族を尊重しようとする、他民族国家であるアメリカの場合理論上の正当性ばかりが先行し、感情面とのズレが生じ、意見の対立が避けられない。こうした意見や感情の衝突や対立は決して心地よいものではないが、その過程で人々は違ったものの見方を学び、自分の考えや感情を相手に伝え、かつ、妥協点をみつける訓練を結果的にはしていると言えるかもしれない。

他と違う事よりも、同じであることに重点がおかれる日本で、人種や文化などの違いを受け入れる環境をつくるのが簡単にはいかないのは明らかだが、とりあえず、現在当たり前にあったり、そんなものだと思っている自

分の周りの状況を様々な角度から見つめ直すことからはじめはどうだろうか。さまざまに視点と言っても、なかなか難しいので、まずは、自分と違う立場にいる人の視点、日本社会で弱い立場にいる人達や在日外国人の視点、特にいつもあまり聞かえてこない人達の声に耳を傾けることが、自分の世界を広げるのに有効だと思う。そのようにして、いろいろな人の声に耳を傾けるうちに、自分の周囲の状況が違って見えて来るだろうし、種々の疑問や意見、問題点もでてくるだろう。今度は、それらを出発点としていかに自分のまわりの環境から不正をなくし、一人一人が尊重されるようにするかを考え、できることから、できる範囲で行動にうつしていく。この過程なくしてはどれだけ海外で生活しても、外国語が話せても、本当の国際性をそなえているとは言えないだろう。国際化の推進には、知識、思考力、行動力、創造力が統合されなければならぬが、何にもまして、他への思いやりがいるはずである。

開発教育の課題 — 違いに對する寛容さ —

アメリカと言うと、誰でもまず多民族国家ということを思い浮かべるだろう。私自信、ニューヨークに住んで毎日のようにそれを実感している。例えば昨日、アパートの窓を取り替えて来た人達がロシア語を話していたかと思えば、今日は、配管工事に来た人達がスペイン語を話していた。こんな光景も今は当たり前となり何の抵抗もなくなってしまうたが、私が一番最初に住んだマサチューセッツ州のある小さな町は、イタリア系やアイルランド系の白人中産階級が多く住む、保守的で排他的要素の強い所だった。私はそこでホームステイをしながら、公立高校に2年間交換留学生として通っていた。その間に見聞きし経験した、白人以外の人種（特に黒人）に対する偏見や差別行為を今でもはっきりと覚えている。そのことについて少し述べたい。

まず州には、人種差別廃止を目指す教育施設統合政策というのがあり、私の高校にも、毎朝ボストン市内から黒人生徒が何人かバスで通っていた。しかし現実には、白人の生徒は白人の生徒と、黒人の生徒は黒人の生徒といつも行動を共にし、お互いの確執がなくなることはなかった。当時、私には“イージェイ”というナイジェリア出身の黒人の友人がいたが、よく他のアメリカ人生徒から、日本

人と黒人の変ったコンビと言われた。お互いに母国を離れて暮らしていたという共通点もあって、屋敷をいっしょに食べたり、休み時間に話をしたりと大変仲良くしていた。ところがある日、彼女を初めて私のホームステイ先に招待したところ、ホストマザーが、「彼女って本当に真っ黒ねー」と、まるで今までに黒人を見たことがないような驚き混じりの顔で私に言った。その時まで、肌の色の違いなど大して気にしていなかったのだが、ホストマザーのその一言で、私は何かいいないことをしているような気持ちになった。そしてイージェイとのつきあいいも、その後次第にとだえてしまった。今にしてみれば、彼女に対して何でひどいことをしたのかと、自分自身がとても恥ずかしく思える。

またある時、アメリカ人の友人と電車に乗ってボストンに行く途中、黒人を見たらバツクに気をつけるよう言われた。そのせいか、その日は1日中、見る黒人全てが皆泥棒のようになんて思ってしまった。悪い人など、何も黒人に限らず白人にも日本人にもいるのに、無知というのには恐ろしいもので、人をこうまで偏見のかたまりにしてしまう。しかし、この様な考え方は、何も黒人だけに対してあったのではない。2年目だ御厄介になった家のホストマザーは、ボストン市内のホテルでウエイトレスをしていたのだが、よくユダヤ人のことを悪く言っていた。例えば何か大きな会合があると、彼らはお金に物を言わして彼女に

威張り散らしたそうさ。ユダヤ人に会ったことなど一度もなかった私は、それでもユダヤ人といのは、裕福で傲慢な人達なのだと決めつけてしまった。

一度誰かに対して偏見を持ってしまうと、これを取り除くのは容易ではない。私の場合、大学が全米で5番目に留学生の多い所だったので、実際にいろんな国から来た人々と交流できたことが役に立った。お互いの考えの違いから衝突することもしばしばあったが、それを通して理解しあうことを学んだ。また、違いだけでなく、いかに多くのものが共通しているのかということも知った。その点、私は幸運だったと思う。何も知らずに、分かってあおうともせずにあのまま日本に帰国していいたら、きっと今でも私は偏見のかたまりだったに違いない。

さて、国際化、国際化といわれて久しい日本ではどうだろうか。2、3年前、日本の大物政治家がアメリカの黒人やヒスパニック系移民に対して差別的な発言を次々とし、その度にアメリカにいた私は肩身の狭い思いをしたことがあった。この様な言動も、つまりは無知からくる偏見といってしまうとそれまでだが、事が国と国との間の問題にまで発展しただけに、そんなふうののんきに構えてはいられなかった。国際理解とか国際交流とか口で言うのは簡単だが、その意味をちゃんと理解し実行に移すことの出来る人は本当のところどれだけいるのだろうかとつくづく

考えさせられてしまった。また、現在、南米やアジアの国々から大勢の人々が日本に働きに来ているが、どれだけの人が彼らについて理解し、彼らと交流を持っているのだろうか。

おそらく、あまりいいのではないかな。そうであれば、何か事件があると、まず彼らを疑うなどというようなことは起きないだろう。最近、東京の郊外で、外国人による痴漢行為が発生しているので気をつけるようにという、全く根拠の無いデマをなんと警察と町会が回覧板で回していたという記事を新聞で読み果れてしまった。これも、外国人という未知の人々に対する偏見と恐怖心の現われだと思う。

これらのことを考えると、日本における開発教育の第一歩は、自分とは違う人達、つまり肌の色や言葉だけでなく、考え方の違う人達に対する寛容さを育むことであるように思う。そうすることによって、偏見無しに初めてお互いを理解し、真の国際交流が可能になるだろう。さらには、欧米ばかりでなくもっと身近なアジアの国々やアフリカなど多種多様な文化に触れ、地球的規模で行動できる人間の教育を目指すべきだろう。

日本の社会、教育の 国際化のために

ニューヨーク「りんごの会」より提案

日本の国際化の可能性

90年代の後半に向けて、いまの東京がいかに国際的になろうとも、日本人ひとりひとりの持つ国際的感覚は、いままでの単眼的な視点から大きく抜け出することは難しいと思われる。今後、日本では、さらに増えると予想される様々な国からの外国人労働者とその家族の存在が、ドイツに見られるような、外国人労働者の排除というより国粋主義的な色彩を帯びることはあっても、移民を積極的に受け入れた国、アメリカとは本質的に異なり、日本社会を国際的な方向へ変えるまでには至らないと思われる。

多民族社会が作り出す国際的・多民族的环境は、一方で民族間の摩擦・衝突、統一性の欠如となって人々の活力をそぐものとなるが、また一方で多様な社会・価値観によって生み出される複眼的な視点は、「ものの価値」を多様にし個人を重視する本来の意味での国際社会を生む環境となる。こうした国際化・多民族化の生み出す社会環境について、私はこの数年間、暮らしながら見てきた「ニューヨーク」と、ときどき垣間見た「東京」との比較から感じたものである。

東京とニューヨークに見られる国際化の方向の違い

この2つの都市の「国際化」をめぐる課題を比較すると、大変興味深いものがある。いま、東京で問われている「国際化」の問題は、いかにして東京を経済・社会的側面において国際的な都市にするかという、言わば見せかけの国際化をめざしているかのように見られる。一方、ここニューヨークは、長い移民の国、ニューヨークが背負う歴史を反映して、「国際化」とはすでに混沌とした国際都市（それが魅力だという人もいるが）をいかにして民族的に調和のとれた都市として再生させるかに向かって、改めて「国際化」を問うているように見える。

日本の社会にふさわしい国際化の道を模索する

日本と欧米の国際化を進める環境の違いを認識して、新たな国際化を進める方法を模索する必要がある。少しずつではあるが、確実に増えている国際化された日本人を、日本社会で窒息させないためのアクションプランが必要である。

社会を緩やかに変える力、「教育」の国際化からまず始める

ここには、日本の社会を国際化するために

「教育」におけるアクション・プランをあげた。

学校教育制度の国際化（小・中・高校・大学の国際化）

＊教員の国際化（外国人教員、異文化生活体験を持つ教員の積極的登用）

＊教育内容の地方・地域による自由度の幅を広げる（現在の文部省指導体制を弱める）

＊開発教育／国際理解教育／異文化理解教育の系統的なカリキュラムの導入

＊小学校段階からの外国語教育・異文化理解教育（英語などの欧米語に限らず）の導入

＊海外教育施設との積極的、長期交流

社会教育の国際化

＊自治体を中心にした「国際化」の日常化の推進

＊学校教育と社会教育の連帯強化

